

社寺の分布密度と霊場について

田上 善夫

The Density Distribution of Temple and Shrine and the Sacred Place

Yoshio TAGAMI

E-mail: tagami@edu.u-toyama.ac.jp

Abstract

In this study, typical sacred places and their surrounding temples and shrines are investigated in Tohoku, Hokuriku, and Kinki district. On typical sacred places in the whole country, the pilgrimage way and the density distribution of sacred points, temple or shrine, are analyzed. In addition, a clarification of the structure of the sacred place is tried to clarify, based on the comparison of the sacred place and the regional feature of the belief facilities such as temple and shrine. The main results of this study are as follows: 1) Sacred places of the same scale in a region usually locate in different areas and do not isolate from each other, coexisting in that region. In addition, these sacred places may be connected together and have a kind of structure such as spatial nesting. 2) An administrative unit such as a city or prefecture has related to the areal unification of sacred places after the modern age, while a county, province or state related to it before the recent age. 3) To the establishing of an areal unification of sacred places, the regional belief base which is found in the distribution of the belief facilities has contributed. 4) In the background, there is a regional natural base that makes people accept the sacred place as the areal unification. Especially, the social space based on the natural base such as an island, peninsula, basin and plain is related to the areal unification in local areas. 5) Moreover, believed spaces such as mountains and mountain ranges have fundamental relations. The influence of the mountain belief appears strongly in the early established sacred place.

キーワード: 寺院, 神社, 霊場, 巡拝

Keywords: temple, shrine, sacred place, pilgrim

I はじめに

日本各地に、さまざまな性格の多数の霊場がある。霊場の空間的な範囲が広域的あるいは局地的であるにせよ、札所の数は三十三や八十八などの聖数にもとづいてほぼ一定である。西洋でのpilgrimageがおよそ聖地・大本山への参詣であるのに対して、日本での巡礼や巡拝では、霊場に並列的に配置された複数の札所が廻られる。ただし同じ寺院内に、さまざまな規模や種類の霊場の札所が置かれることも多い。そのため同じ寺院内におかれた、異なる霊場の札所も、それぞれの霊場において占める位置は異なるものと考えられ、札所と霊場の性格を複雑にさせている。

中世よりさまざまな霊場が開創され継承される背景には、霊場についての理解の一般的な定着、受容がある。こうした特定の範囲が、霊場という地域的まとまりとみなされるところには、中心となる有力寺院や、霊場に接続する著名な修行地などが、しばしばみられる。霊場の札所は主に寺院に置かれるが、

古来、また地方では神社などに置かれることも多く、霊場には、寺社のような施設に示される地域の信仰的基盤がかかわると考えられる。

ところで霊地では、五穀豊穡の祈願、また大風・洪水・雷のような災害除祈願などの行事・祭事が行われてきた。霊地にはさらに神社や神仏習合の寺院などの信仰施設がおかれる。近世以前に開創された霊場や地方の霊場ではとくに、神仏習合の霊地が札所とされ、さらに札所を連ねて巡礼がなされる。さまざまな行事・祭事の行われる霊地が一定数集まって組織された霊場と、その背景にある地域の信仰的基盤との関係が解明されるなら、霊場に関して開創はじめ性格や意義などが明らかになる。さらにさまざまな行事・祭事の行われる霊地を巡礼する人々の行動や目的が明らかにされるなら、中世以来各地に残される経塚や納経帳などの記録は、歴史時代の災害やそれをもたらす気候変遷の復元に資することが期待される。

霊場には多くの事象がかかわるために、種々の側

面から解明を進める必要がある。はじめに霊地という場所があり、場所に関する解明により、人々の巡礼という行動の解明が進められ、さらに関連した諸事象の解明も可能になるものと考えられる。そのため本論では、まず東北、北陸、近畿の典型的な霊場について、札所の実態を周辺の環境などを通して明らかにする。一方で、寺社などの信仰施設などの分布密度にもとづいて、地域の信仰的基盤を明らかにする。さらに霊場の場所の性格および地域の信仰的基盤の特色にもとづき、霊場の諸構造について検討することを試みる。

II 山岳社寺と周辺の霊場

1. 秋田の寺社の混在する霊場

秋田三十三観音霊場（以下、秋田観音霊場と略記）は、秋田県下に昭和62（1987）年に開創された（田上善夫，2004b）。長久年間（1040-44）に定められたと伝わる秋田六郡三十三観音霊場（以下、秋田六郡霊場と略記）をもとにしている。秋田六郡霊場は、含まれる比内の庄が陸奥国から出羽国に編入された時期などから、天正年間（1573-92）以降の開創と考えられている（高橋富美雄，2002）。菅江真澄は文化十（1813）年に、花の出羽路：秋田・山本，月の出羽路：河辺・仙北，雪の出羽路：雄勝・平鹿のように分けて、地誌の編纂に着手した。現在は鹿角・大館・能代・秋田・本荘・大曲・横手・湯沢の8広域都市圏が設定されている。

秋田観音霊場および秋田六郡霊場の札所の所在地（秋田魁新報社出版部編，1998）からその位置や推定される順路を示す（図1）。秋田観音霊場の札所の位置は半数近くが大きく変更されているため、札所の順番はやや不規則である。おおよそ羽州街道に沿った地域に分布しており、まず1）横手周辺に始まり、2）湯沢・本荘を経て、横手の北の3）大曲に戻り、北上して4）秋田を通り、海側の5）能代を巡った後に、内陸の6）大館・鹿角に至る。

現在の秋田観音霊場の概要を、上記の地域にまとめて記す。なお秋田観音霊場の三十三寺は、曹洞宗24をはじめ禅系が27寺を占める。他は真言系3，浄土系3寺である。古く天台・真言系の寺院が改宗したものが多い。

横手周辺

横手盆地南部には、第一番から第六番がある。とくに横手市を中心としている。第一番正伝寺は、横

手市の中心部から南方約4kmの同市大屋新町字鬼嵐にある。もとは南西1kmほどの大屋沼の近くにあった密教寺院で、明暦三（1657）年以降に現在地に移転した曹洞宗寺院である。寺の門前に桜並木が続き、山門、鐘楼、本堂がある。なだらかな小丘の西麓にある禅寺の造りの本堂は、入口がやや左寄りにある。また本堂裏手には、新たな墓地が造られる。

また、横手市中心部から3km北の同市追廻町に、第二番光明寺がある。応仁以前の開山であるが、横手市の中心部から、この比高10mほどの小高い地に移転した。浄土宗で、本堂の建物は新しい。さらに、第三番三井寺は横手市街の鍛冶町にある黄檗宗寺院で、境内には墓地を併設する。以前は通りの向かいの前郷一番町にあり、さらに坂上田村麻呂のところに、旭岡山に観音が祀られたといわれる。秋田六郡霊場でも、第三番は三井寺観音である。

横手市は横手盆地の東縁にあるが、横手川の開口部にあたっている。現在も秋田道が、北上市から脊梁山脈を越えて横手に入る。第一番から三番の位置は、横手盆地のみならず、秋田への入口にあたっている。また、秋田六郡霊場の第一番は、横手市街の北東8kmにそびえる御嶽山（751m）の白滝観音である。山頂の塩湯彦神社は、秋田県内の3式内社の1つである。

続く第四番から六番は、横手盆地の南縁と西縁にあたる。第五番蔵光院は真言宗御室派で、雄物川町沼館字沼館（現横手市）にある。長治年間（1104-5）に、現在地の南方の雄勝郡羽後町に開創され、大永二（1522）年頃小野寺氏とともに移転した。応徳三（1086）年の後三年の役での沼の柵の本丸跡にあり、現在も高さ6～10mの土塁で囲まれる内に、山門、本堂がある。この観音堂は天和三（1683）年に建立され、宝永年中（1704-11）に仙北三十三観音の第三十三番札所となった。また天保十四（1843）年には雄勝山三十三所観音が、境内の池水を巡って安置された。

湯沢・本荘周辺

横手盆地南部の湯沢と、沿岸の本荘周辺には、不規則に第七番から第十番がある。本荘市（現由利本荘市）は、子吉川の河口に開けた港町である。

本荘市街から4kmほど内陸側の赤田に、第八番長谷寺がある。安永四（1775）年開山の曹洞宗寺院である。赤田大仏といわれ、大仏殿内に高さ7.87m

の十一面観音像が祀られるほか、山神なども祀られている。8月22日の赤田大仏まつりは、同寺と神明社が一体となって行われる豊作予祝の祭りで、胎内仏が御輿で1kmほどの神明社に運ばれ、また戻る（齊藤壽胤，1997）。

本荘市街を囲む寺町の一角に、第十番永泉寺がある。寛永十六（1639）年の開山で、本荘藩六郷家の菩提寺である。高さ8mの大きな山門があり、境内に三十三観音や出羽三山の石碑が建つ。

大曲周辺

横手盆地の北側、雄物川が盆地から流出する大曲周辺には、第十一番から第十七番がある。雄物川に臨む平賀郡大森町（現横手市）の中心部を見下ろす小山の麓に、第十一番大慈寺がある。長和二（1013）年今宿に開創された密教寺院だが、応安二（1369）年に曹洞宗寺院として再興された。本堂の本尊左手に、観音が祀られている。

横手市中心部から北に7km、横手盆地東部の丘陵の一つに、後三年役で金沢の柵が置かれた。清原家衡は15km南西の沼の柵からここに移ったが、義家・清衡の連合軍の前に寛治元（1087）年に滅んだ。先述のように沼の柵には第五番蔵光院があるが、金沢柵の鬼門方向に、第十三番祇園寺がある。真言宗から曹洞宗となった。金洗沢鍛冶屋敷金洗観音といわれるように、祇園寺は厨川が流れ出る谷中の、一番奥まった平地にある。祇園寺境内の裏手、金沢の柵の本丸下斜面には、天保の頃に開かれた三十三観音があり、高さ数十cmの石仏が数mほどの間隔で並ぶ（図2）。またそばの道には、大正15（1926）年ころの十六羅漢が並ぶ。

横手盆地の北部、仙北郡六郷町（現横手市）は、東方の真昼岳（1060m）などから流れる丸子川の形成した扇状地上にある。六郷扇状地の扇端部の湧水群があり、ニタイコツ（アイヌ語で、森林の中に清い水たまりがある、の意）に由来するニテコ清水のそばには、仁手古神社の小祠が祀られる。六郷町に南北に延びる寺町の一角の広大な境内に、第十四番本覚寺がある。真昼山の麓にあったが、弘治三（1557）年に天台宗から浄土宗となり、慶長八（1603）年に現在地に移った。参道脇に墓石群が並び、赤い山門の奥の本堂と、右手に観音堂がある。

本覚寺の西方1km、六郷町のはずれに、第十五番栄泉寺がある。真言宗の宝珠院が、文和年間（1352-6）に曹洞宗の栄泉寺として開山した。秋田

六郡霊場は、半分は神社であったといわれ、祇園寺や本覚寺などは札所であったが、栄泉寺は現秋田観音霊場で札所となった。

なお秋田六郡霊場での第十五番は黒尊仏森の観音であるが、角館から約30km、また田沢湖岸から北8kmにあり、現在は鳩峯神社と称している。菅江真澄によれば、秋峯では第一番の白滝観音から真弘の嶽（真昼岳）、薬師ヶ嶽にこの黒尊仏を巡拝して十三日で白滝に帰ったという。さらに田沢湖から南に院内観音（現大蔵神社）、蓮池観音（現金峰神社）、小沼観音（現小沼神社）が角館の東方へと続くが、真言密教や修験道の中心地である黒尊仏森の観音に関係していたと考えられている。また小沼観音、院内観音は、角館北方の小山田の真山寺、小杉山の第十六番円満寺とともにこの地方の密教の四大寺院であった（高橋富美雄，2002）。

横手盆地の北東部、角館町（現仙北市）には第十二番常光院がある。寛正元（1460）年常陸に開山され、佐竹氏とともに移った。城山から南に武家屋敷が続く、保存された河原田家などは、間口20～30m、奥行100mほどもあり、庭には大きな樹木が茂る。旧町の南端に寺が集められており、町中の細い参道の奥に、明和二（1765）年に完成した大きな伽藍がある。

なお横手盆地北西部の大曲の下流、雄物川と玉川が合流する大仙市神宮寺の羽黒山いこいの森には、明治元（1868）年に作られた三十三体の「地藏」があるという。この神宮寺^{そえかわ}には秋田の3式内社の1つ、副川神社が鎮座していた。秋田六郡第十七番の高善寺は、雄物川の10kmほど下流である。

秋田周辺

太平山（1170m）の山麓部から、旧八郎潟の周辺には、第十八番から第二十四番がある。八郎潟を開め切る船越防潮水門付近、寒風山（355m）の東方に、第二十番龍門寺がある。中世の開基といわれるが、堂宇は再建中で、庭石のみ残されている。参道左側に砂岩の数十cmの三十三観音石像が並ぶ。石像には祖先供養の名前も刻まれ、実数は40近い。

八郎潟の西岸、南秋田郡若美町（現男鹿市）に第二十二番永源寺がある。沿岸砂丘の内陸側に集落と街道が走るが、八郎潟を向いて建つ。室町末期の開創といわれる曹洞宗寺院で、本堂の左寄りに上り口がある。

能代周辺

県南部と異なり北部の沿岸には札所が連なり、第二十五番から第二十八番がある。米代川河口の能代港を見下ろす位置に、第二十五番龍泉寺がある。仏教伝来直後に鳳凰庵となり、永禄三（1560）年に湯殿山傘下となる。秋田市街と八郎潟の間の上新城にあった、やはり養老年間（717-23）開山と歴史の古い龍泉寺を、明治19（1886）年に合併して寺院となった。円空作の十一面観音勢至菩薩像をまつり、「御神燈」の提灯がかかる。なお石段下の二十七番・三番観音堂と書かれた堂宇には石仏を祀り、太鼓が置かれる（図3）が、龍泉寺とは全く別で町場のものという。

米代川河口から南に続く砂丘は、海側から頂部まで松林となる。その内陸側に、第二十七番長慶寺がある。境内は広く、山門に仁王像が立つ。貞観四（862）年に白神山地の田代岳（1178m）に開山し、長久年間（1040-4）に秋田六郡霊場の第三十番七倉観音の別院となったが、長禄年間（1457-60）に能代に移った後、現在地には昭和25（1950）年に移転した。

大館・鹿角周辺

大館・鹿角周辺には、第二十九番から第三十三番がある。米代川に白神山地から流れる藤琴川が合流する二ツ井町（現能代市）に、第二十九番梅林寺がある。小高い地で、登り道に三十三観音が並ぶ。秋田六郡霊場では高岩山高岩寺と記されるが、高岩山きみまちさかは後后阪の頂上に天安年間（857-8）に天台宗として開かれた。現在も頂上下の227m地点に、高岩神社があり、藤琴川に高岩橋がかかる。慶長十（1605）年には曹洞宗として高岩山麓に開山し、元禄十二（1693）年に二ツ井町の荷上場町に移り、昭和63（1988）年に墓地とともに現在地へ移転した。

米代川の上流、鹿角市の尾去沢に第三十番圓通寺がある。江戸時代中期頃から多くの末庵があり、大正末に合併して大盛寺となり、昭和15（1940）年に圓通寺となった。尾去沢鉾山に向かって墓があり、また昭和11（1936）年11月20日の鉾津ダム決壊による犠牲者380名をまつる慰霊観音堂がある。秋田六郡霊場では、第三十番は七倉山宝蔵観音であるが、七倉山（200m）は二ツ井の約20km南方である。

米代川が流れの向きを変える大館の市街に、第三十一番玉林寺がある。大永七（1527）年に浅利氏の居城の、鳳凰山（520m）麓に建立し、東館村（現大館市）を経て、慶長七（1602）年に現在地に移っ

た。近くの有浦観音堂は観音堂有浦神社ともいわれ、蔵のような堂には木造観音像が祀られ、大館神明社の札が貼られる。

鹿角市の十和田には、第三十二番仁叟寺がある。境内裏手の斜面の墓地には、和井内貞行、内藤湖南の墓がある。応永二（1395）年に千徳氏が岩手に善勝寺を開山し、天文三（1532）年に桜庭氏が中興し、さらに明暦三（1657）年に宝珠寺跡に移して仁叟寺を開山した。天文以来の住職の墓碑がある。秋田六郡霊場の第三十二番の松峰山は大館市街の4km北方である。

結願の第三十三番信正寺は、大館市街から6km北方、大館盆地の縁にある（図4）。もとは下内川を4kmほど北に遡った男神山（340m）・女神山の麓の真言宗寺院であった。天正のころ現在地に移転し、承応元（1652）年に曹洞禅林となって信正寺と改称した。出羽六郡の満願札所である。

2. 秋田観音霊場周辺の社寺等

笹森丘陵周辺

横手盆地と日本海間、雄物川と子吉川に挟まれて笹森丘陵が伸び、その中に保呂羽山（438m）がそびえる。波宇志別神社は、秋田県内の式内社を代表する。ただし式内社の塩湯彦神社、副川神社が、秋田六郡霊場で重要な位置を占める一方、波宇志別神社は、秋田六郡霊場に含まれない。

保呂羽山の320m付近から上は、細い山道となる。途中には鳥居もなく、女人の入れるのは下居堂までである。さらにブナ林中に、鎖場、子守石、佐竹藩と亀田藩の境に作られたという一夜盛と、峻険な道が続く。山頂付近は稜線が北に伸び、波宇志別神社の4、5間四方ほどの社殿が北向きに建つ（図5）。内部には壇があり、また万治元（1658）年の棟札がある。

保呂羽山は横手盆地と日本海側の分水界であるが、5km東の八沢木木根坂に、波宇志別神社の里宮がある。なだらかな沢に沿う標高120mほどの地は、田はわずかで、家も境内周囲に3戸のみであり、里宮とはいえ、山間部にある。この波宇志別神社の里宮はここ1ヶ所だけで、天平宝字元（757）年に勧請された。

里宮の神職を退職した96歳の女性によれば、ここで霜月神楽が行われる。3戸だけで神社を維持し、神楽を伝えてきた。女子たちが小学生のころから稽

古をし、同人が教える。今は大森町（現横手市）の病院勤務の看護師、同人の孫、40歳くらいの女性が舞う。霜月神楽は11月初めの雪はまだない紅葉の季節に行われる。舞を見に、広島や北海道からもやってくる。以前は300人が周囲に集まって夜通しであった。今は遠くから来る80人ほどの人は夜から朝までいるが、車で来て車で帰る人たちの出入りも多い。

保呂羽山頂は本殿だが、本殿は明治の頃に再建され、仁王門が室町時代のものである。近くに神楽殿があり、5月8日に舞が行われるが、里宮の神楽とは別である。太鼓は獣の皮なので持ち込まないため鳴り物はなく、舞うときも板を叩いたりして音をたてる。

波宇志別神社から最も近い札所は、里宮から6km余東にある大慈寺で、秋田六郡霊場以来、秋田観音霊場においても第十一番が置かれている。

沿岸部周辺

秋田六郡霊場では、第二十六番長谷寺を除いて、海を望む地に札所は置かれなかった。ただし、そうした地においても、類似した信仰施設はみられる。

秋田市街から4kmほど南、現在の雄物川河口右岸付近、勝平寺に隣接して石山観音が建つ。文治年間（1185-90）に引き上げられた石仏である。この比高30mほどの海岸段丘上の100m×50mにわたって、昭和27（1952）年5月に三十三観音が安置された（図6）。海あるいは川を見おろす方向に、砂岩製の石仏が順不同に安置される。地蔵や一部に三尊、また新たな平和観音なども安置される。

米代川河口の南には、長さ14km、幅1.5kmほどの砂丘帯が続き、風の松原とよばれる。海側は新しい能代港と工業団地で、漁船も停泊している。サイクリングロード、あずまや、パルプ撒きで歩きやすい健康作りの道が続く園地となる。松が多く、細くひねくれた樹幹はやや内陸側に傾き、一番上の神社に近いあたりでとくに顕著である。およそ25mほどの小丘に、大森稲荷が建つ（図7）。砂丘の一番高い位置にあるが、海側を見通すことはできない。境内には八大竜王神が祀られ、赤い鳥居が続く奥に本殿があり、左手に5つの境内社がある。石や陶製の七福神像や小さな稲荷、その他さまざまな神仏像などが祀られる。また、お堂などは持ち込まないように、との但し書きがついている。津軽の稲荷に大変似ている。

風の松原北端の米代川を見おろす日和山（33m）には、関、能代出入方役所、沖の口御番所跡の碑が建つ。敷地の奥が、県社日吉神社の御旅所で、12m×12mほどが石垣で囲まれている。一番高い位置が県社八幡社の御旅所で、10m×10mが石で囲われ、入口にも道はない。左側に八幡大師と書かれた70～80cmほどの石が安置されている。また脇に墓石も置かれている。

もともと河口付近には湊が位置し、雄物川河口に秋田、米代川河口には能代が発展した。雄物川は旧河道から大きく付替えられているが、周辺は住宅地として発展している。そうした都市部にも霊場類似の信仰施設がみられるが、とくに秋田六郡霊場の札所が置かれなかったことは、同霊場の性質に起因するものと考えられる。

3. 白山と周辺山岳社寺

平泉寺白山神社

とくに秋田六郡霊場の札所には、神仏習合の寺社また修験の寺社が随所にみられる。北陸では白山修験が主要であるが、その加賀、美濃とならぶ越前馬場^{ばば}に、現在の平泉寺白山神社がある（図8）。

麓の勝山は城下町で、九頭竜川の物資も積み卸しされていた。高度170mほどの下馬大橋から長く延びる丘の上を、杉の巨木が並ぶ参道^{ぼだいばやし}、菩提林の石畳道が緩やかに上る（図9）。道の脇に金札、牛磐、馬岩、また昭和4（1929）年の西国三十三観音が並ぶ。

境内には、祠の中に二つの石がおかれた結神社^{むすび}、東尋坊の跡、大乘妙典六十六部日本廻国供養塔、室町時代の高さ1.4mの泰澄大師墓などが立ち並ぶ。六千坊の一つであった顕海寺と玄成院庭園が残る。御手洗池^{みたらしのいけ}、平泉^{ひらしみず}は、平泉寺の名の由来であり、泰澄大師が訪れると、池中央の影向岩^{ようごういわ}に白山の女神、権現が現れ、女神の導きで白山頂上へ至ったという。

参道に、神仏習合の様式である屋根の付いた二の鳥居が建つ（図10）。かつて境内に四十八社あったが、二の鳥居より上にも、今宮や中谷から移された縁結観音菩薩・池尾明神、今宮神社、鎮守宮や、稲荷大明神、辻之宮社などの祠が建つ。

高度約300mに位置する拝殿には、中宮平泉寺の扁額がかかり、天正二（1574）年まで幅四十五間あったという。中央の本社は白山妙理大権現^{おおなむち}、右の別山社は天忍穂耳尊・別山大権現、左の越南知社は越南知大権現^{かなつるぎ}、先に金剣社と加宝社の五社がなら

ぶ。六十六部では越前で、法華経をここに納めた。

坂の上にある三之宮は、安産の守護神、^{たぐはた}栲幡千々姫尊を祀る。また延元年間（1336-40）の楠正成公の墓、五輪塔がある。平泉寺は、後醍醐天皇方についていた。さらに白山禅定道平泉寺登拝の道が続く。さらに白山頂上は越前室で、加賀の室堂は大汝にあった。

南谷には、低い岩壁の前に若宮神社、杉の神木がたつ。南谷坊院跡には、石畳の道が発掘されている。僧達は居住地から平泉寺に通っていた。さらに行場の瀧がある。

平泉白山神社を創建した泰澄大師は、天武天皇十（682）年に現在の福井市に生まれ、丹生郡の越知山（612m）で修行し、養老元（717）年に平泉から白山頂上に登り、千日修行をしたと伝わる。嘉承三（850）年には三所の社壇があるのみであったが、久安三（1147）年に平泉を延暦寺の末寺にと訴え、平泉寺とよばれるようになる。境内は東西2 km、南北1 km、僧ら8,000人に及んだが、天正二（1574）年に加賀の一向一揆に敗れ、後に秀吉により中心部が再建された。修験の地であり、御前峰は大宮妙理大権現いざなみのみこと一十一面観音、大汝峰は越南知大権現あめのおしほみみのみこと一大己貴尊一阿弥陀如来、別山は小白山こしらやま行司別山権現あめのおしほみみのみこと一聖観自在菩薩とされる。越前禅定道には正面本堂ぬくかわ十二宿があり、また金剣の峰、釈迦の原、法音、弘川、温川、伏拝、河上、秘密谷、一之瀬ひのしゆく、檜之宿、尾平、弥陀之原で、礼拝された（勝山市教育委員会、1992）。

この平泉寺白山神社は、昭和56（1981）年開創の北陸三十三観音霊場、昭和59（1984）年開創の北陸三十六不動尊霊場（田上善夫、2003）の、札所には含まれない。ただし延宝年間（1673-81）頃に成立した、越前の国中三十三所観音廻札所（越前国地西国）では、平泉寺の観音堂は第十二番とされている（田上善夫、2004a）。同霊場は坂井、福井、奥越、丹南に展開しており、平泉寺白山神社もその中の霊場に組み込まれていた。

奥越の寺院

平泉寺門前の集落には、四十八社、三十六堂の一つ辻観音堂があり、平安後期の絵の仏像が残される。神社とは別に、天台宗霊応山平泉寺も伝わる。さらに、一向一揆平定後の天正八（1580）年に築かれた勝山城が、参道入口前の猪野瀬に復元され、隣接の小丘に、四十八社の白山稚児神社や日之御前社が

建つ。平泉寺の南の女神川^{おながみ}と九頭竜川間の赤尾の段丘上には、大渡神社・白山神社が鎮座する。段丘下の九頭竜川^{はこ}の宮の渡は、泰澄大師が渡り、中世には平泉寺衆徒が利用していたという。

白山神社平泉寺から8 km南西にある大野は、金森長近が城下を東西六筋、南北六筋に区画して東端を寺町として固めたが、現在も寺町通りとよばれ南北約1 kmにわたって20余の寺院が並ぶ。寺院の宗派は、天台系、真言系、浄土系、禅系、日蓮系など多岐にわたる。神社も郷社の日吉神社、熊野神社など山岳に縁が深い。また、時宗梅溪山知足院恵光寺には天満宮御肖像が鎮座し、川渚大権現祈願所などもあり、神仏習合を示す。時宗遍照山奥之院では、毎月10日に観音講が行われる。

大野付近にも霊場札所はあり、天台真盛宗蓮光寺は慈摂大師二十五霊場の第十三番である。また正平年中（1346-70）創建の高野山真言宗恵日山大寶寺には、境内に亀田八十八とよばれる「八十八箇所観世音菩薩」の石像が並ぶ。これらの仏像は四国八十八ヶ所の写しで、大正8（1919）年などの銘がみられる。また、大野城の頂（249m）には権現宮跡があり、山内に凝灰岩で作られた高さ1 mほどの仏像33体が20mほどに並び、亀山観音といわれる。像には大正7（1918）年没の銘がみられ、新しい。

江戸初めの越前の国中三十三所観音廻札所では、大野付近では第十三番が黒谷に、第十四番が木の本に置かれている（杉原丈夫、1980）。しかし、どちらとも大野市街ではなく、南方の山麓にある。

越前五山と越前観音霊場

白山に福井平野周辺部の四山を含め、越前五山とよばれる（福井県立博物館、1987）。福井市中心部から南西20kmの丹生山地にある越知山（613m）は、白山に次いで大きく、泰澄大師に縁の大谷寺がある。さらに、鯖武盆地南端の日野山（795m）はかぐつちのかみ軻遇突知神を祀り、福井平野と鯖武盆地間の文殊山（351m）は泰澄大師により開かれ、福井市の東10kmの吉野岳（547m）には蔵王大権現が祀られる。

越知山には、大御前・十一面観音、別山権現・聖観音、大己貴権現・阿弥陀の三峰などが祀られている。山頂から東に5 kmの谷合に、天台宗の越知山おおたんじ大谷寺があり、門前に立石が並び、境内に大師堂や神社がある（図11）。大谷寺は越知神社遥拝所（里宮）の位置にあり、越知神の大講堂という。泰澄が持統



図5 霊場に隣接する式内社
保呂羽山山頂の波宇志神社



図6 沿岸部の三十三観音
雄物川河口の段丘上の石山観音



図7 第二十五番長慶寺近接の社
海側、風の松原にある大森稲荷

図1 新旧の秋田観音霊場

赤字：現在の秋田三十三観音霊場
黒字：旧秋田六郡三十三観音霊場
巡拝路はゼンリン電子地図帳ZP4により設定。丘陵には波宇志別神社。

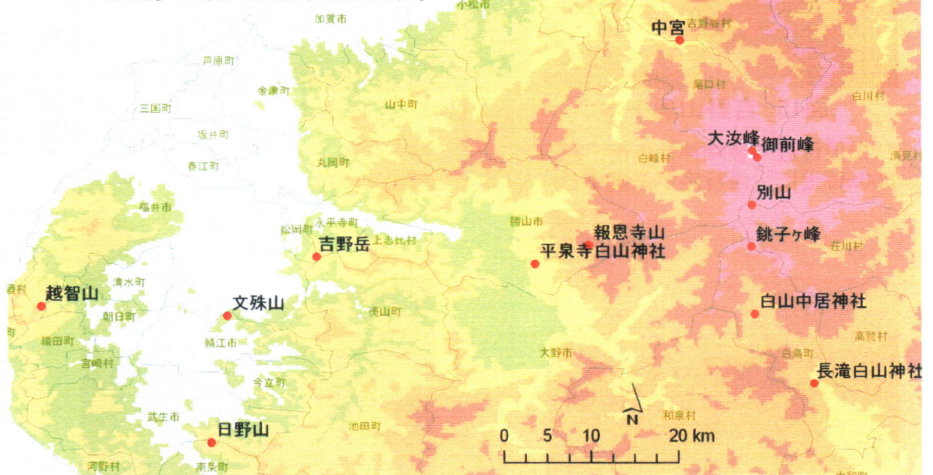


図8 白山の三馬場と越前五山

白山に向かって禅定道が、越前は平泉白山神社から、加賀は白山比咩神社から、美濃は長滝白山神社からのびる。白山を含め、福井平野周辺に越前五山が位置する。



図2 札所寺院の子霊場

秋田霊場第十三番祇園寺の境内にある三十三観音



図3 札所寺院に隣接する観音
第二十五番龍泉寺門前の観音堂



図4 秋田観音霊場の結願
現在の第三十三番信正寺の付近



図9 白山への越前側の入口
丘陵上に平泉寺白山神社がある



図10 白山神社二の鳥居
境内に寺社がともにまつられる



図11 越知山山麓の寺社
大谷寺境内に越知神社を祀る



図12 文殊山
越前五山。山麓に多くの寺社がある。



図13 葛城二十八宿と大峰奥駆道

緑色の葛城は回峰入峰の地で、加太友ヶ島から大和川亀の瀬に至る。赤色の大峰では吉野から熊野の稜線沿いに、75のなびきという行所が連なる。両者の位置には、青色の西国観音霊場と密接な関係がみられる。



図14 犬鳴山七宝瀧寺
不動前で柴燈護摩を厳修



図15 吉野山奥千本

山頂付近の金峰神社の南、標高800m付近に、西行庵が位置する



図16 吉野山中千本

長くのびる尾根上の標高360m付近に金峰山寺が位置する



図17 御破裂山からの飛鳥

談山神社の境内の北側にそびえ、大和三山が遠望される



図18 信貴山朝護孫子寺

信貴山麓に位置し、境内に入る深い谷に沿って、堂宇がならぶ



図19 生駒山寶山寺

聖天さんとよばれ、崖の般若窟前に本堂がある

天皇九（695）年あるいは六（692）年に、越知山三所大権現の本地の地主大聖不動明王を彫って、安置したことに始まる。泰澄は越知山、日野山、文殊山、吉野岳、白山等々に登峰して修行した後、天平宝字二（758）年に77才で帰山し、神護景雲元（767）年にこの寺で遷化した。お墓と伝えられる九輪塔がある。

泰澄由来の寺は秋田から長崎までであるが、かつて日本海側は船で容易に行けるところであった。また新潟では多いが、富山で少ないのは、立山信仰が影響しているという。かつて平泉に六千坊があったときには、大谷寺に一千坊があったという。数年前の頂上付近での試掘調査で仏具の破片が出たが、泰澄の時代から60～70年ほどしか変わらず、泰澄伝承につながりものである。越知山・越知神社は山岳信仰発祥の地で、山上の室堂で宿泊・修行も行われる。大谷寺付近は、越知神社とは異なりやや低い、日本海に見える位置にある。

大谷寺の5 km南、越知川の鯖江盆地への開口部に神仏習合の八坂神社がある。その南の福通寺は、真言宗東寺派朝日観音別当といわれる。本堂の木造196cmの正観世音菩薩は、養老元（717）年の泰澄大師御山籠り作と伝わり、観音堂の像高120cmの千手観音菩薩立像も泰澄作と伝わる。隣接した八幡社、稲荷は泰澄が鎮守としたと伝わる。福通寺は現在、北陸三十三観音霊場第九番、北陸三十六不動尊霊場第三十一番、越前国三十三観音霊場第三十番である。

文殊山は角原富士ともいわれる。泰澄が養老元（717）年に、大文殊（365m）に文殊菩薩、西の奥の院に観世音菩薩、東の室堂（小文殊）に阿弥陀如来を安置したが、五台山を移し国家鎮護に備えたという。また文殊山には、金剛岩、胎内くぐりの巨岩、観音聖場・三十三ヶ所、岩洞などがあり、南麓には白山神社がある。大文殊からは、4,300年前の縄文土器片が出土した（図12）。文殊山には大正寺、大村、南井、西袋、帆谷、二上、角原の登山口がある。4月25日の文殊祭は周辺の村々の春祭である。大村の文殊山楞嚴寺は養老元（717）年に、泰澄が開いたと伝わる。その観音堂には、鎌倉時代の作と伝わる薬師如来、十一面観音菩薩、阿弥陀如来が祀られる。また文殊山の西3 kmの三十八社には、泰澄が誕生した地の泰澄寺があり、現在は真言宗智山派である。

先述のように、越前では近世初めに国中三十三所観音廻札所が開創されていた。越知山の東麓の杖立に始まり、坂井、奥越、福井、丹南を廻って越知山の太谷寺に戻る。泰澄寺は第二十五番、また福通寺は第三十番として含まれている（北川弥平、1974）。同霊場は神仏習合の寺院を連ね、泰澄の開創伝承を共有しており、越知山を中心に構成されている。

4. 西国観音霊場と周辺の山岳社寺

西国観音霊場

日本の霊場の嚆矢は、西国三十三観音霊場と考えられる。大阪平野・奈良盆地周辺には、西国観音霊場の多くの札所がある（田上善夫、2006）。また周辺には多くの山岳社寺がある。

大阪平野を西流する大和川の南に、西国観音霊場の第五番札所紫雲山葛井寺がある。平安末にはすでに著名な観音霊場であったという。大阪平野から奈良盆地への要地で、周辺のやや小高い地に応神天皇陵をはじめ多くの古墳がある。葛井寺の名は、葛井連と改姓した王仁一族にちなみ、隣接した式内大社の辛国神社も、物部氏一族の辛国連の名にちなむ。

大阪平野の南部に、西国観音霊場の第四番札所槇尾山施福寺がある。槇尾川の溪流沿いに参道が1 km余り続き、満願滝弁財天などが祀られ、尾根上（485m）に本堂がある。槇尾明神社の裏手の経塚から、保延五（1139）年銘の経筒が出土しているが、「巻尾山」の山号は、役小角が法華経一部八巻二十八品の最後を埋納したことにちなむとされる。ただし、以下の葛城第二十八宿とは異なり、また和泉山脈の主稜部からは4 kmほど北に離れている。

葛城山

大阪府一和歌山県境の和泉山脈から、大阪府一奈良県境の金剛山地は、葛城とよばれる修行の地である（膽谷健一、2000）。葛城二十八宿は、友ヶ島から亀ノ尾までで、葛城の峰の山林抖擻で験力を得る（図13）。

葛城第八宿のある犬鳴山七宝瀧寺は、齊明天皇七（661）年に役行者が創建した。大峯山より6年早いため、元山上ヶ岳といわれる。後に、役行者の終焉の地である。境内に四十八瀧があり、9世紀初めに淳和天皇が七寶瀧寺と名付ける。中世には、七宝瀧寺は根来寺のもとにあった（井田寿邦、2005）。修験道最高権威の熊野三山検校である聖護院は15

世紀に本山派を結成していたが、根来寺は高野山、粉川寺とともに敢えて当山派となった(関口真規子、2006)。昭和25(1950)年に真言宗犬鳴派となり、修験道部が置かれている。

粉川道から和泉砂岩層を侵食した大木溪谷沿いに1 km余の参道があり、山内二十八宿が設けられている。両界の滝、犬鳴山総門、瑞龍門、中世の板碑、護摩場を経て、本堂があり、その奥に、行者くぐり岩、行者の滝がある。護摩場では、般若心経、不動明王の経、俱利伽羅不動明王への経、優婆塞の経があげられる。行者の滝には、三宝大荒神の剣婆荒神が祀られる。

本堂下の不動明王の前に、護摩場がおかれる。平成17(2005)年11月6日には、午前10時ころより柴燈大護摩が行われ、開始後17分から太鼓、般若心経、法螺貝、般若心経が繰り返される。犬鳴山は女人大峯と言われ、39分から女人行者に修験問答がされる。法螺貝が吹かれ、「案内申すー」に、「どうれー」と応じ、修験、役行者、根本、などを問う。55分から、護摩に矢を放ち、結界作法では四隅で矢を放つ(図14)。69分から太鼓が打たれ、柴燈護摩が焚かれ、護摩木が投じられるが、小雨に濡れた檜の葉から、濛々たる白煙が上がる。

七宝瀧寺には、俱利伽羅大龍不動明王や生命乞不動尊が祀られ、昭和54(1979)年開創の近畿三十六不動尊霊場の第三十三番札所になっている。

大峰山

大峰は葛城とともに金剛界・胎蔵界を構成するとされ、修験の中心の地である。大峰は中央構造線の南に位置し、北の大和平野との間に竜門岳(904m)がそびえ、また紀ノ川上流の吉野川が西流する。入口の吉野から尾根が南に伸びて8 km先には青根ヶ峯があり、東に温泉谷・泉湯谷、西に南院谷・左曾谷が入る(図15)。

先述の葛城に続いて、役行者が山上ヶ岳(1719m)の大峯山寺と、吉野山の金峯山寺に蔵王堂を開いた。修験の地であり、昭和23(1948)年に金峰山修験本宗となった(役行者霊跡札所会、2002)。現存の金峯山寺の蔵王堂は、天正二十(1592)年に建立された。金剛蔵王権現が祀られるが、釈迦如来、千手観音、弥勒菩薩の垂迹である。深い青色をした憤怒相の像が並び、中央のものは高さ7.3mある。

金峰山寺の周辺には、多くの寺社がある。大峯山東南院は、木曾の御嶽山中興の覚明行者が、蔵王堂

の東南、巽の方向に建てたもので、金峰山修験本宗の別格本山である。入口にある勝手神社あるいは山口神社は、平成13(2001)年に焼失したが、吉野八社明神の一つで、大山祇、木花咲耶姫などを祀る。大峰山(護法山)喜蔵院は、聖護院門跡の本山修験宗別格本山であり、本山修験の大先達を努め、吉野山四宿坊の一つであり、山上ヶ岳にも宿泊所がある。

上千本から上には、自然を崇敬した寺社などが多い。吉野山は南大和の水源神(水分神)として信仰されたが、上千本には吉野水分神社がある。式内大社で、豊臣秀頼が再建した桃山様式の三連の美しい社殿がある。高城山(702m)は、高御産巢霊神たかみむすびのかみにちなみ、同神は高木神ともいわれ、犬鳴山にも同名の山がある。奥千本入口の金峯神社は、吉野山の総地主神の金山彦命を祀る式内社で、金精明神こんしやうともいわれる。大峯山への第二の門、修行門があり、境内には義経の隠れ塔がある。さらに稜線を超えた南斜面の林間には、明治まで宝塔院や安禅寺などの寺院群があった。また谷の中に苔清水という湧水があり、30m四方ほどの平坦地に、二間四方の西行庵がある。

金峰山寺の南朝妙法殿は、後醍醐天皇の行宮である。また中千本から谷一つ隔て東に如意輪寺があり、隣接して延元四(1339)年に崩御した後醍醐天皇の塔尾稜がある(図16)。吉野の周辺には西国観音霊場の札所はないが、大和国の一国霊場としての写しもみられない。現在でも多くの修験の施設があり、また大峰にかけても同様であるが、中世には南朝の拠点であり、他地域とは異なることが考えられる。

奈良盆地の周辺山地

奈良盆地には西国観音霊場をはじめ多くの霊場が開かれているが、それらの札所が周辺山地の寺社に多くみられる。飛鳥から4 km南東、多武峯たうのみねの谷中に談山神社がある。飛鳥からみて、二上山は夕日が沈むのに対し、多武峯は朝日が昇る地である。斉明天皇二(656)年に、たむの嶺上に石垣を巡らし、楓の樹の下に宮を建てたと記されるが、それらはたわ(鞍部)、岩境、依代を示しており、また十三重塔は鎌足の塔婆である(談山神社編、1998)。境内には関伽井屋があり、竜王が出現し、さらに山神神社、杉山神社、神明神社などの小祠がある。また談山かたらい(566m)、談所の森で蘇我入鹿討が謀られ、御破裂山ごはれつさん(628m)には周囲85mの鎌足の円墳がある。大和三山を一望するこのあたりを磐余とい

い、日本国と名づけた饒速日命にぎはやひのみことの地であるが、後に
 入った神武はカムヤマトイワレヒコと名乗った(図
 17)。多武峯の談山神社は、朝日が昇り水神・山神
 を祀り、葛井寺同様に饒速日命と物部氏縁の地であ
 り、西国観音霊場の札所ではないが、後述の大神神
 社、朝護孫子寺とともに、大和七福八宝めぐりの札
 所である。

大和川(初瀬川)の奈良盆地への開口部に、三輪
 山(467m)がそびえる。その大神神社は大和国一
 宮で三輪明神といわれ、大物主大神おおみわを祀る。三輪山
 に奥津磐座、中津磐座、辺津磐座があり、聖天石と
 いわれる夫婦岩は辺津磐座の一つである。山麓の参
 道に祇戸社、磐座神社、霊泉のある狭井神社、智恵
 の神の久延彦神社、大直禰子神社おおたねこ(若宮社)、琴平
 社など20余社がある。また大神神社は酒の神・釀
 造の神で、酒祭り、酒米講があり、拝殿正面に「し
 るしの杉玉」がさがる。大神神社の神宮寺で、三輪
 社奥の院の平等寺は、581年に聖徳太子が大三輪寺
 として開いたとされる。室町・江戸時代には修験道
 の霊地で、大峯に向かう修験者が波切不動明王の滝
 で行をした。平等寺は十一面観音、三輪不動尊など
 を祀り、現在大和霊場第八十一番となっており、大
 神神社自体も、大和七福八宝めぐりの札所である。

三輪山の北7km、布留川の開口部に近い布留山
 (266m)麓に南面し、石上神宮が鎮座する。拝殿
 の後方の禁足地に、布都御魂大神を祀る。平国之
 剣つるぎ、天璽十種瑞宝あまつしるしとくさのみづのたから、天十握剣あめのとつかのつるぎや七支刀ななつさやのたちにまつわり、
 後に石上氏と改めた物部氏の総氏神である。布留石
 上明神の神宮寺の内山永久寺に、後醍醐天皇が一時
 身を隠したといわれるが、明治に廃絶した。

奈良盆地西縁にある生駒山地南部の信貴山
 (437m)南麓に、信貴山朝護孫子寺がある(図
 18)。毘沙門天(多聞天)が現れて聖徳太子を守護
 したことから信貴山と名付け、延喜二(903)年に
 醍醐天皇が病氣平癒して朝護孫子寺となる。現在は
 信貴山真言宗総本山である。大門池を隔てた斜面
 に、懸造りの堂がある。大和十三仏第十一番、真言
 宗十八本山巡拝、大和七福八宝めぐり、役行者霊蹟
 札所巡礼の札所であり、また信貴山奥之院は大和北
 部八十八箇所第四十五番である。

生駒山地北部の生駒山(642m)の北東麓に、
 生駒山寶山寺がある(図19)。天智天皇三(664)年、
 役行者が修行し、この地を内院、大峯山を外院に擬
 したという。延宝六(1678)年に湛海律師が開き、

貞享三(1686)年に歓喜天をまつる聖天堂を建立
 する。本堂から上方に、永代浴湯や報恩謝徳の石柱
 が並び、数十メートル先の岩壁に、高さ10m、奥
 行き3mほどの般若窟がある。ここは近畿三十六不
 動第二十九番、大和十三仏第一番、西国愛染明王第
 十四番、仏塔古寺十八尊第十五番などの札所であり、
 また観音講でのお参りの行事案内が書かれる。

大阪平野の北縁、中山(478m)の南麓に、清
 荒神清澄寺がある。寛平八(896)年に荒神社を鎮
 守として開山し、昭和22(1947)年に真言三宝宗
 の大本山となった。中山山麓には寺社や古墳が多数
 並ぶ。阪急宝塚線の清荒神駅から曲がりくねった参
 道に商店が並び、山麓の溪流の奥に、左手が清三宝
 大荒神王、正面と右手が蓬莱山清澄寺となる。主な
 祭は三宝荒神にかかわり、三宝荒神が大きく描かれ
 る。寺院本堂と神社本殿間には、宝稲荷明神、荒神
 影向の櫛、龍王堂、奉納の火箸、神変大菩薩(役小
 角)などが祀られる。1km東が西国観音霊場の第
 二十四番中山寺である。

Ⅲ 巡拝路・札所の密度と寺社の影響

1. 全国各地の霊場の巡拝路と札所密度

全国の神社と寺院、また主要な30余霊場を選び、
 巡拝路と札所密度について分析する。まずゼンリン
 社の電子地図帳ZPR4上で、神社と寺院や札所の経
 緯度座標を得る。また霊場の札所の順から、ルート
 探索機能により巡拝路の経緯度座標を得る。さらに
 ESRI社のArcGIS9を利用して、神社と寺院や札所の
 経緯度座標から位置を示し、さらに密度分布を等値
 線で描いた(表1)。この寺社や札所の密度分布と
 巡拝路にもとづいて、地域の信仰的基盤について検
 討を試みる。

北海道

北海道三十三観音霊場は、北海道を8の字を描く
 ように巡る。札所密度は札幌から旭川にかけてきわ
 めて高く、道北と道東では低くなる(図20)。諸寺
 院は都市部に多く開創され、明治以後の社会の影響
 が分布に強く表れている。北海道には先住民の霊
 地・聖地があり、集落の広場などで祭祀が行われ、
 また沖縄よりもさらに本土の影響を受けるのが遅い
 ため、他に霊場が潜在することが考えられる。北海
 道への修験の伝播は不明であるが、北辺の地での山
 林抖擻、山野跋涉は様相が異なることが考えられる。

東北

表1 主要な地方霊場の札所分布の中心

地域	霊場	札所分布の中心
北海道	北海道三十三観音霊場	札幌から旭川
東北	奥州三十三観音霊場	仙台平野北部
東北	津軽三十三観音霊場	弘前東部から岩木川沿いに十三湖
東北	秋田三十三観音霊場	秋田県南、横手盆地
東北	庄内三十三観音霊場	庄内平野の周辺山麓
東北	最上三十三観音霊場	山形市付近、山形盆地北部
東北	置賜三十三観音霊場	白鷹、長井、米沢付近
東北	会津三十三観音霊場	会津若松から喜多方にかけて
東北	信達三十三観音霊場	福島盆地の東部、福島市と伊達町の境付近
関東	坂東三十三観音霊場	鎌倉周辺、筑波山付近
関東	那須三十三観音霊場	那須町周辺、大田原市周辺
関東	下野三十三観音霊場	栃木市から宇都宮市南部、日光から大田原
関東	秩父三十三観音霊場	秩父の市街地、秩父神社付近
関東	新上総国三十三観音霊場	東京湾側、鹿野山(379m)の北西側、富津市
関東	安房三十三観音霊場	内房側、とくに館山市の周辺山麓
関東	御府内八十八ヶ所霊場	外堀の外側の上野、浅草、芝、四谷
関東	昭和新撰江戸三十三観音霊場	南部の芝・高輪周辺と北部の上野・小石川周辺
関東	豊島八十八ヶ所霊場	東西方向への列状の配置
関東	鎌倉三十三観音霊場	鎌倉の市街地、若宮大路の鶴岡八幡宮寄り
中部	越後三十三観音霊場	長岡市から出雲崎、とくに三島町付近
中部	信濃三十三観音霊場	長野盆地、とくに川中島付近
中部	伊豆横道三十三観音霊場	松崎、下田、河津付近
近畿	西国三十三観音霊場	京都付近
近畿	葛城二十八宿	葛城山周辺
近畿	大峰奥駈道	/
近畿	京の大廻	/
近畿	洛陽三十三観音霊場	京都市東山区、六波羅蜜寺付近
近畿	洛西三十三観音霊場	桂川沿いと西山の山麓付近
中国	出雲三十三観音霊場	松江付近と斐伊川沿岸
中国	広島新四国八十八ヶ所霊場	広島市街、とくに中区北部の広島城周辺地域
四国	四国八十八ヶ所霊場	阿波、讃岐、松山、今治付近
九州	九州八十八ヶ所霊場	九州北部、筑紫平野周辺
九州	九州二十四地蔵尊霊場	直方平野西部および佐世保周辺
九州	九州三十六不動霊場	筑紫平野と国東半島
九州	九州薬師四十九院霊場	筑紫平野と直方平野

奥州三十三観音霊場の分布密度は、大きな偏りがある(図21)。奥州観音霊場の札所密度が高いのは、宮城県北部の岩手県境の地域であり、仙台平野北部の栗駒山麓にあたる。一方、海岸部には少なく、また岩手県北部の3寺院はとくに隔たっている。小山

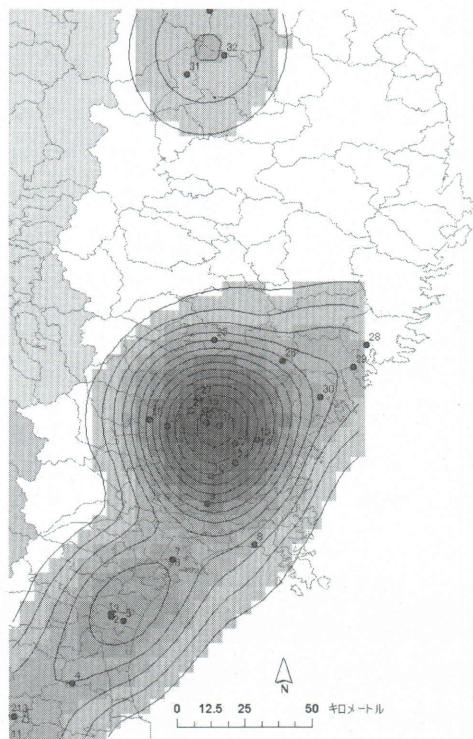


図21 奥州三十三観音霊場

に位置する修験寺院が多く、開創はこの地域の開発に結びつく。大和勢力の進出が遅れた北部に少ないが、阿豆流為の故地の胆沢地方にはとくに少ない。

北東北

の、津軽三十三観音霊場の札所が集中するのは、岩木山を望む地域である(図22)。密度分布の中心は弘前の東方にあり、密度の高い地域が岩木川に沿って十三湖へと伸びる。一方で陸奥湾沿岸には少ないが、アイヌ文化の影響の強い地域である。札所にさまざまな起源がみられ、寺院とは限らずに神社も多い。秋田三十三観音霊場の密度は、秋田県の内陸中部・南部地域で高く、最大の中心は横手盆地の横手市付近にある。また秋田から能代、大館周辺でも高い。

南東北の、庄内三十三観音霊場の札所分布は、庄内平野周辺の山麓に沿う(図23)。羽黒付近でやや高いが、一極に集中せずに分散している。最上三十三観音霊場には、密度分布の大きな中心が2つあり、一つ

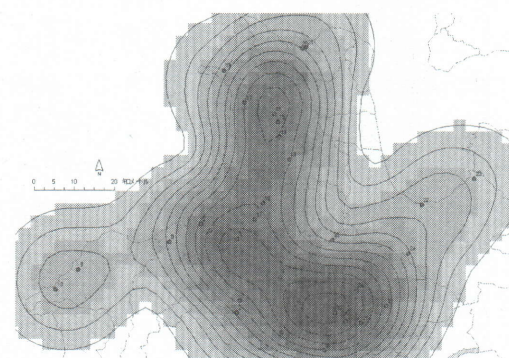


図22 津軽三十三観音霊場

は山形市付近、他は山形盆地北部の大石田から尾花沢にかけてである。最上川の上流部の米沢盆地にある置賜三十三観音霊場は、密度分布の中心が3つに別れ、白鷹、長井、米沢付近にある。会津三十三観音霊場でも、他の盆地と同様に周縁部に札所が連なり、会津若松から喜多方にかけて南北に分布密度が高い。ただし盆地中央の阿賀野川沿いにも密度の高い地域があり、北は飯豊に連なる。信達三十三観音霊場では、福島盆地の東部の福島市と伊達町の境付近に多い。その東方には、霊山(806m)がそびえている。

関東

坂東三十三観音霊場では、札所は鎌倉周辺に最も集中している。また筑波山付近などにも分布の中心がある。



図 23 庄内三十三観音霊場

日光から大田原にかけて東西に、分布密度の高い地帯が現れる。

南関東の秩父三十四観音霊場は、札所は秩父の市街地に集中している（図24）。かつて札所であ

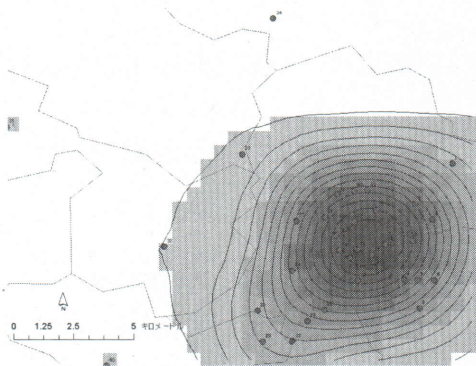


図 24 秩父三十四観音霊場

た、秩父神社付近に中心がある。新上総国三十三観音霊場では、札所は東京湾側に偏在しており、とくに鹿野山（379m）の北西側、富津市に集中している。安房三十四観音霊場でも、内房側に集中している（図25）。とくに館山市の周辺山麓に多いが、清澄など鴨川から東は孤立している。御府内八十八ヶ所霊場では、外堀より外側に環状に密度の高い地域があらわれる。中でも上野、浅草、芝、四谷などではとくに高い。昭和新撰江戸三十三観音霊場では、南部の芝・高輪周辺と北部の上野・小石川周辺に2つの中心がある（図26）。多いのは江戸城の北と南であり、東と西には少ない。豊島八十八ヶ所霊場は、武蔵野台地の北縁に位置し、札所は全般的に分散しているが、東西方向への列状の

北関東の、那須三十三観音霊場は、鹿島灘に注ぐ那珂川の上流部に位置する。那須町周辺と大田原市周辺に、2つの中心がある。下野三十三観音霊場は、栃木市から宇都宮市にかけて、また、

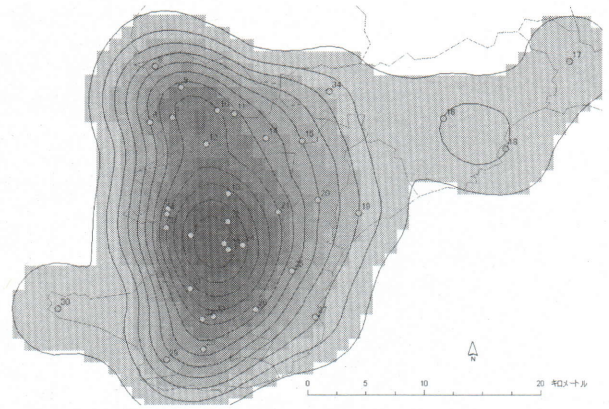


図 25 安房三十四観音霊場

配置がみられる。鎌倉三十三観音霊場は、周囲を丘陵で囲まれた地の中心部にまとまる。中心は鎌倉の市街地、とくに若宮大路の鶴岡八幡宮寄りの位置に

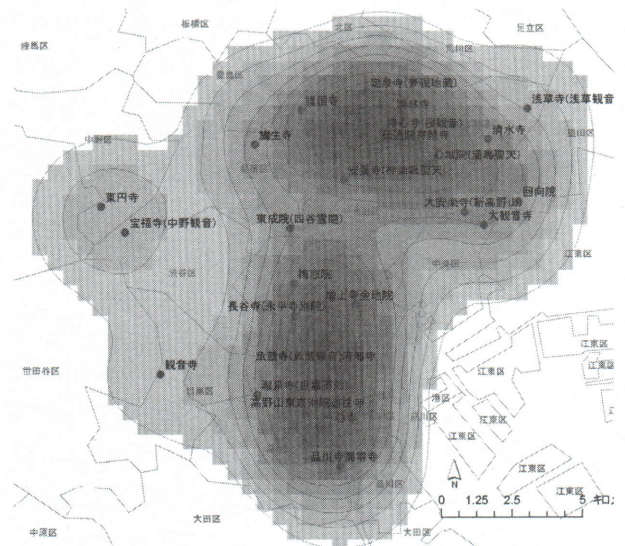


図 26 昭和新撰江戸三十三観音霊場

ある。

中部

越後三十三観音霊場では、札所は海岸部に多い

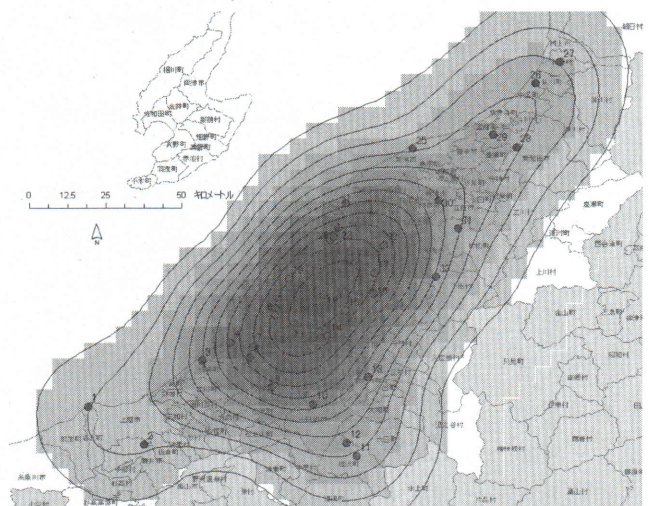


図 27 越後三十三観音霊場

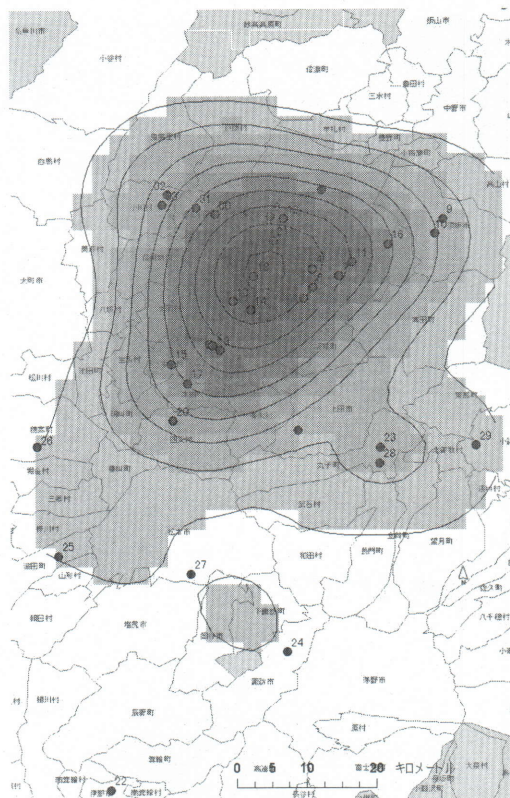


図 28 信濃三十三観音霊場

島町付近にあり、上越市や新潟市は中心から大きく外れる。信濃三十三観音霊場の札所は諏訪以北にあるが、分布の中心は長野盆地にあり、とくに川中島付近に集中している（図28）。伊豆横道三十三観音霊場は、安房観音霊場と同様に、半島の最南端に位置し、また紀伊半島の熊野とも類似した位置にある。山々の連なる地は、南朝に先んじて源氏が度々依ることになった。密度が高いのは沿岸であるが、下田付近、河津付近、とくに西岸の松崎付近が高い。

近畿

西国三十三観音霊場では、札所は京都付近に顕著に集中している。坂東観音霊場で札所が鎌倉に集中する以上である。

葛城二十八宿は、西の紀淡海峡から東の和泉山脈、金剛山地に至る。葛城山（858m）周辺に、多くの宿がみられる。大峰奥駈道は、近畿地方の最高所の大峰山脈に南北に続く。大峰は京から飛鳥への道の南方に続くが、近代の聖護院では峰入前、峰入、峰入後で修行の性質が異なる。

京都大廻では、比叡山の回峰に続いて、京都市街にある霊地を結ぶ（図29）。その順路は復活した洛陽三十三観音霊場の巡拝路と類似する。この洛陽観音霊場の札所は京都市の東山区付近に集中して、中心は六波羅蜜寺付近にあり、密度の高い地域は北西

が、とくに越後平野の周辺部に多い（図27）。札所は、北は村上まで、内陸は塩沢までであるが、中心は長岡市から出雲崎、とくに三

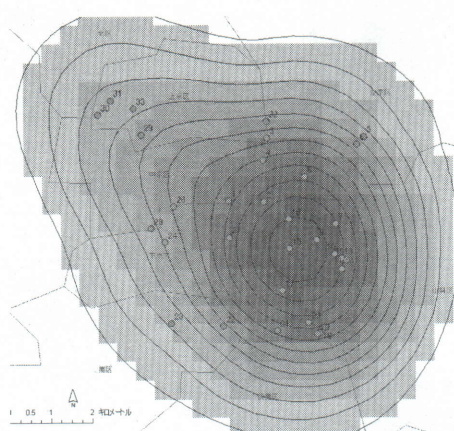


図 30 洛陽三十三観音霊場

の北野に延びる（図30）。洛西三十三観音霊場の札所は、桂川沿いと西山山麓に多いが、とくに西京区、南区、向日市の境付近に

集中している。

中国

出雲には古い神社が多く、特有の信仰的基盤があるが、曹洞宗寺院の多い地域でもある。出雲三十三観音霊場は、中国地方で最も古い霊場といわれ、松江付近と斐伊川沿岸に2つの中心があるが、島根半島東部は入らない（図31）。広島新四国八十八ヶ所霊場は、宮島の弥山を含む霊場である（図32）。しかし札所は広島市街地に多く、とくに中区、南区、東区付近に集中し、広島城周辺地域で最多となる。

四国

四国八十八ヶ所霊場は、阿波、讃岐、松山、今治付近に集中しており、小松、土佐にも小さな中心がみられる。土佐は四国遍路では特異な地域であるが、その札所密度はかなり低い。

九州

九州八十八ヶ所霊場は、本尊は阿弥陀が多いが、真言宗寺院には諸尊が祀られるため、観音や不動霊場が重なることがある（図33）。札所は九州北部、筑紫平野周辺にとくに集中している。九州二十四地藏尊霊場は、九州北部に広がり、分布は2つに別れ、直方平野西部および佐世保周辺に中心がある（図34）。九州三十六不動霊場は、筑紫平野と国東半島が二つの大きな中心である（図35）。ほかに九州南部にも中心があるが、この2地域に比べて小さい。九州薬師四十九院霊場は、筑紫平野と直方平野に中心がある（図36）。また大分付近にも中心があるが、南九州には少ない。

2. 全国各地の寺社の密度

地域の宗教的基盤を信仰施設としての神社および寺院からみると、全国の宗教法人の数は神社、寺院

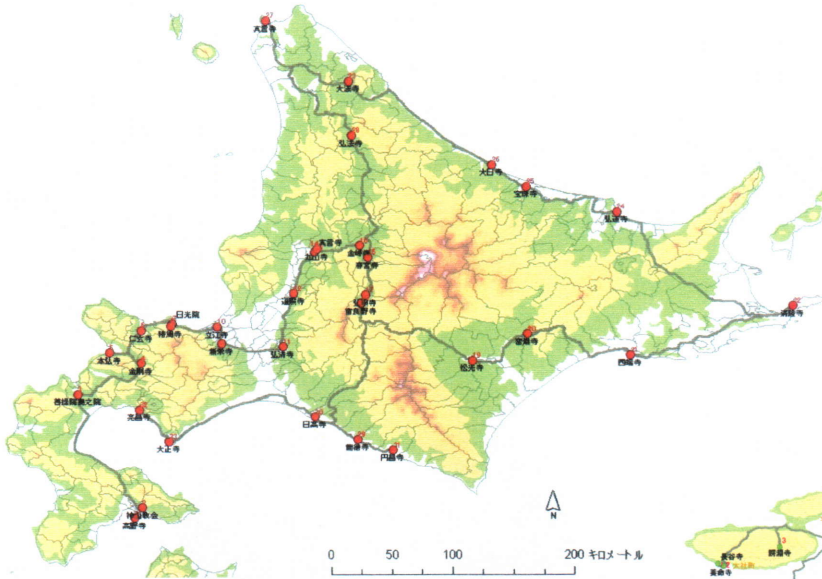


図20 北海道三十三観音霊場

ルートはゼンリンZP4による探索結果で示す。
他の図でも同様。

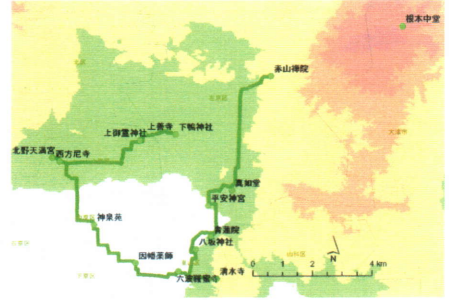


図29 京都大廻り

比叡山の千日回峰行に連なり、京都市中の寺社が廻られる

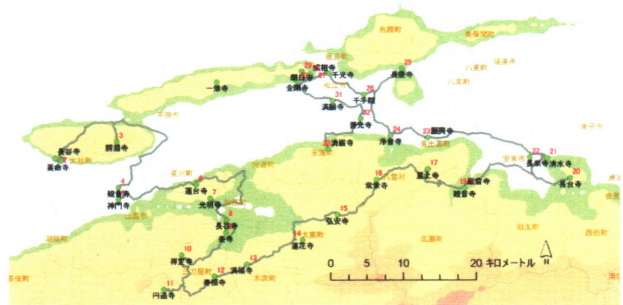


図31 出雲三十三観音霊場

開創は古く、札所は出雲国一円に広がる

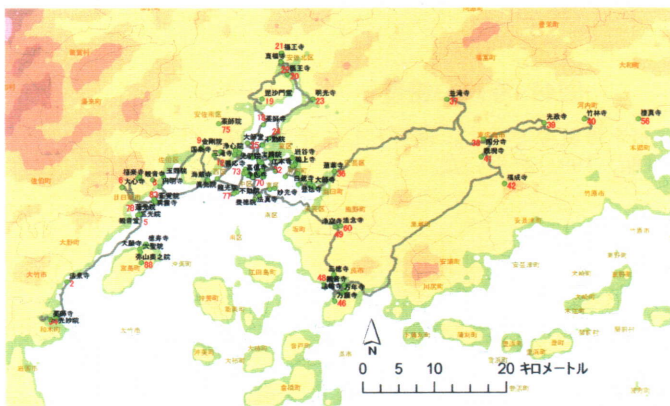


図32 広島新四国霊場

宮島の弥山山頂が結願で、札所は広島市街に多い

図34 九州二十四地藏尊霊場

昭和61(1986)年に開創され、北九州、筑後、西海、筑前の各六地藏尊霊場からなり、九州北部の平野部を巡る

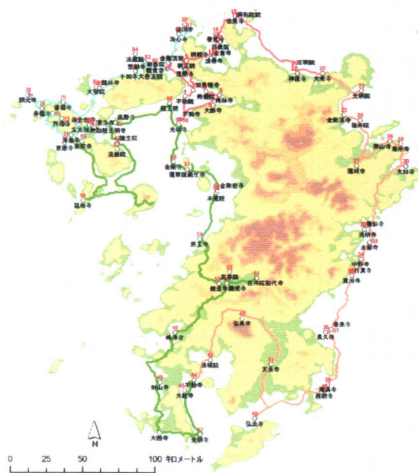


図33 九州八十八ヶ所霊場

昭和59(1984)年開創、全て真言系寺院で、玄界灘寄りに多くの札所がある。巡拝路を1/4づつ別色で示し、35、36図も同様。

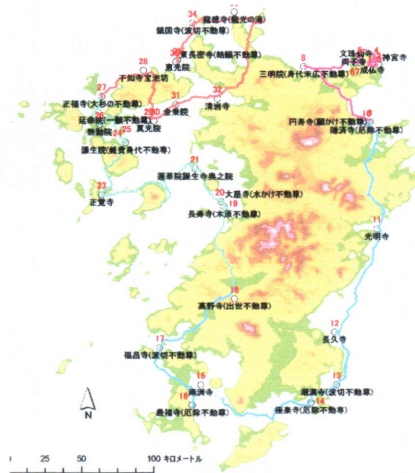


図35 九州三十六不動霊場

昭和60(1985)年開創で、国東からはじまり、国東半島と筑紫山地周辺に札所が多い

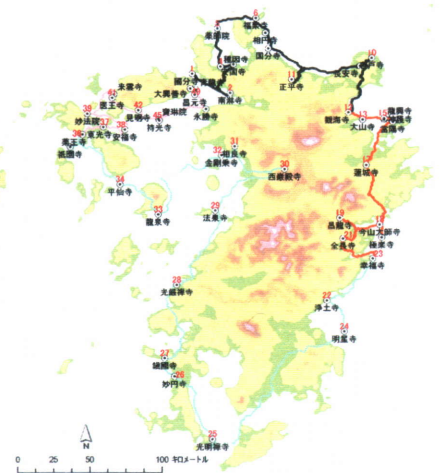


図36 九州四十九院薬師霊場

平成11(1999)年の開創で、大宰府に始まり、筑紫山地の南側に札所が多い

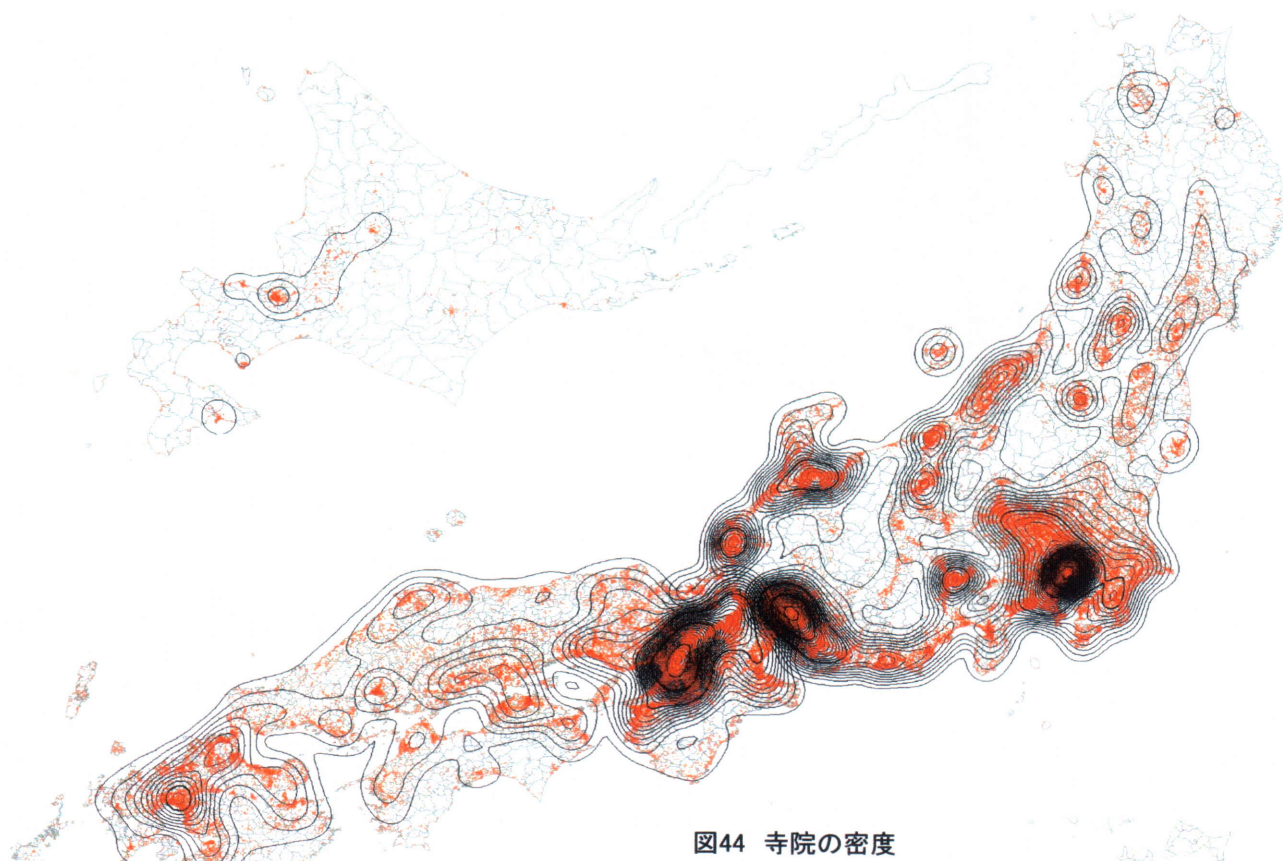


図44 寺院の密度

密度分布を等値線で示す。資料として全国寺院大観(法蔵館, 1991)を用いた。

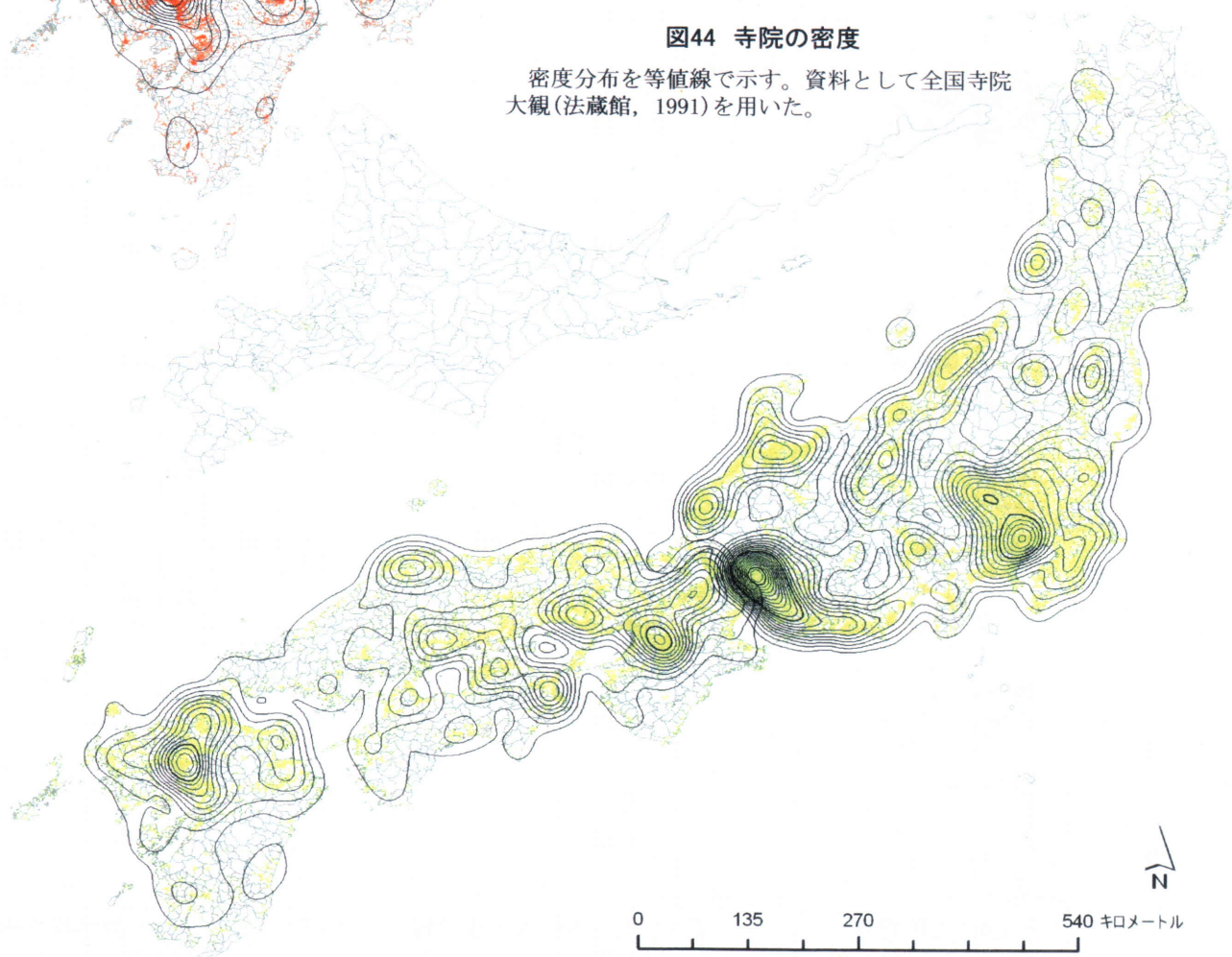


図45 神社の密度

密度分布を等値線で示す。資料として、全国神社祭祀祭礼総合調査(神社本庁, 1995)を用いた。

0 135 270 540 キロメートル



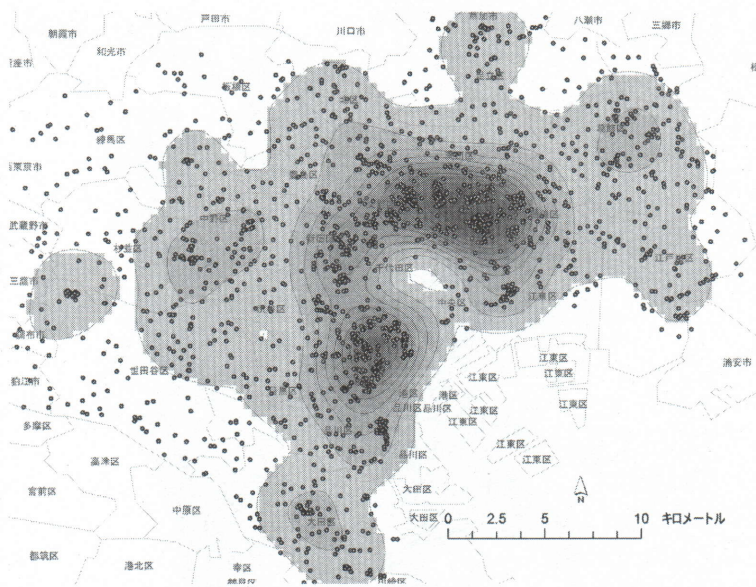


図 37 東京の寺院密度

ともそれぞれ10万に近い。ただし地域的に偏りがある。前述の札所と同様に、密度分布を等値線で表すと、全国、および主要地域における、その特色は以下のとおりである。

寺院の密度

関東地方では、関東平野に多いが、とくに東京に集中し、横

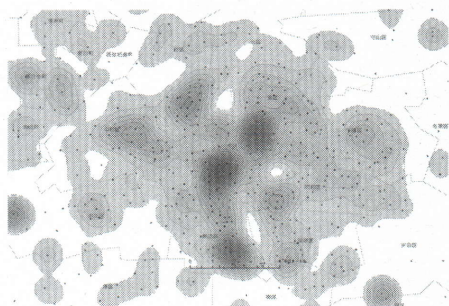


図 38 名古屋の寺院密度

浜方面に高密度地域が延びる。この分布は現在の

人口密度の分布とはやや異なっており、平野部においても茨城県では低い（図37）。東京23区内でも周辺部ほど低くなっているが、都心部でも低く、外堀の外側に環状に高密度

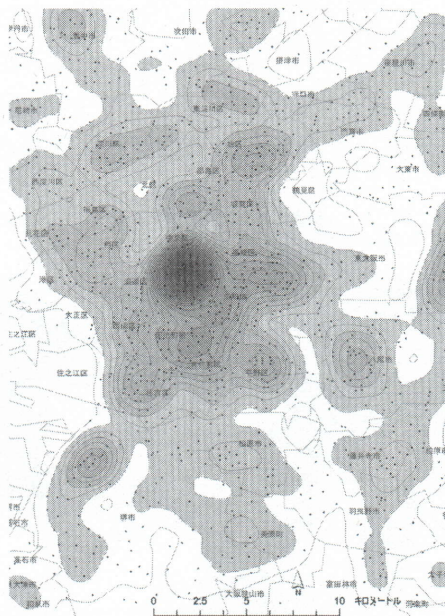


図 39 大阪の寺院密度

地域がある。最大は浅草付近で上野方面に伸び、また南でも芝、高輪付近でとくに高い。周辺部においても、葛飾、中野、大田付近には集中がみられる。もともと往古の寺社配置があった地に、江戸の城と町づくりが開始されて、寺社は外堀の外に移されており、上野・浅草や芝・高輪に寺社が多いのは、都市政策・寺社政策がかかわる。さらにそのもとには、地形などの自然的基盤や鬼門・鎮守などの信仰的基盤がある。

神奈川県では、およそ東海道沿いに高い地域がある。すなわち、横浜、鎌倉、小田原に中心があり、平塚から伊勢原への相模川沿岸にも多い。名古屋では、名古屋城の周辺にあたる西区、東区、中区に中心があ

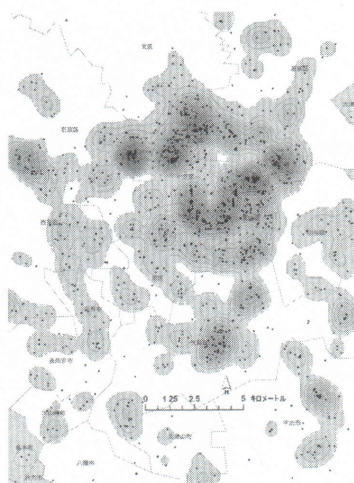


図 40 京都の寺院密度

る（図38）。ただし城の北側では低い。また熱田区にも中心があり、密度が高い地域が中心部から南に伸びる。

近畿地方では、京都、大阪、神戸の市街地周辺でとくに高い。大阪では、中心部に集中している。とくに天王寺区付近に集中しており、四天王寺のやや北側に中心がある。南の住吉方面にやや伸び、旭区、東成区、平野区、西区、淀川区付近にも中心がみられる（図39）。京都では、御所の周囲を取り囲むようにして密度が高い。また西の花園付近や嵐山付近にも多く、南の伏見にも高い地域がある（図40）。筑紫平野では、有明海沿岸で高く、とくに佐賀市の周辺部に集中する。また久留米市付近にも中心が存在する。

神社の密度

関東では、神社の密度分布は寺院の密度分布とかなり異なる。東京付近のほか、関東平野各地に高い地域が現れる（図41）。ただし鎌倉付近には少ない。また関東山地の山麓部に多く、高崎から榛名山麓にかけてとくに高い様子がみられる。また坂東観音霊場の巡拝路は、神社密度の高い地域をたどるようすがみられる。

近畿でも、神社の密度分布の中心は寺院の場合と異なり、京阪神への集中だけではない(図42)。とくに奈良で高く、大阪湾から瀬戸内海沿岸地域、また琵琶湖東岸地域でも高くなる。西国観音霊場の巡拝路は、その地域を通っている(図43)。

北九州では、有明海沿岸で高いが、長崎では低くなる。また九州の瀬戸内海沿岸地域でも高い。九州西国霊場の巡拝路は、神社の密度の高い地域をたどっている。

神社密度の影響

全国的に寺院の密度分布をみると、その地域的差異は大きい。三大都市圏で高く、続いて北陸、さらに東海や、北九州の筑紫平野でも高い(図44)。北陸は人口密度に対して、寺院の密度は高い。筑紫平野では、有明海周辺の大牟田、久留米、とくに佐賀で高く、福

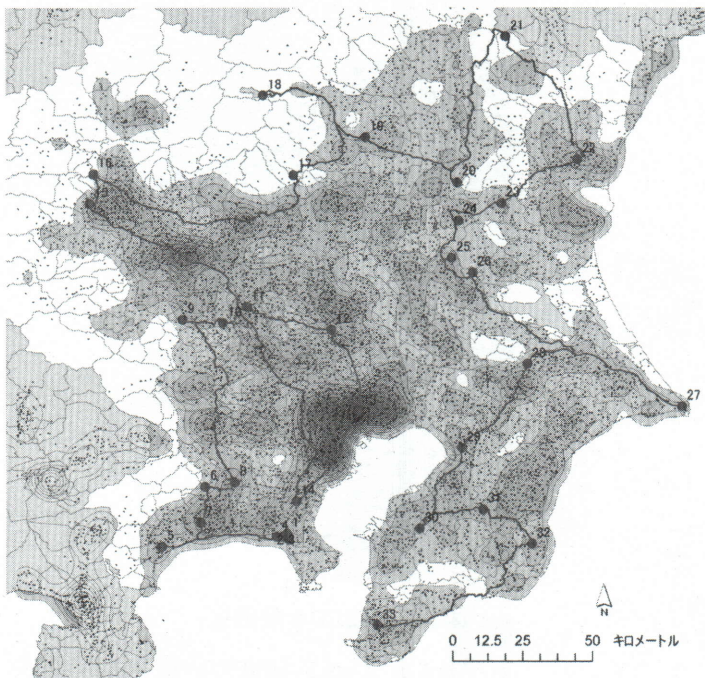


図41 関東の神社密度と坂東霊場

多い。九州では、有明海付近よりむしろ東の英彦山から筑後平野、背振山、有明海で高く、玄界灘方面は低い。

前述のように寺社の密度分布は、個々の都市の内部で特色があり、東京は外堀の外郭、京都は御所の周囲、名古屋でも城の周囲に寺院が密集する一方、大阪では天王寺付近で密度がとくに高いなど、一つの中心をもつことも多い。また地方では、多くの集落が立地するところでは密度が高くなる。

ところで、寺院は宗派により、また神社も著名社ごとに密度分布に大きな差がある。こうした寺社の種別による密度の違いは、霊場ごとに異なる影響を与えて

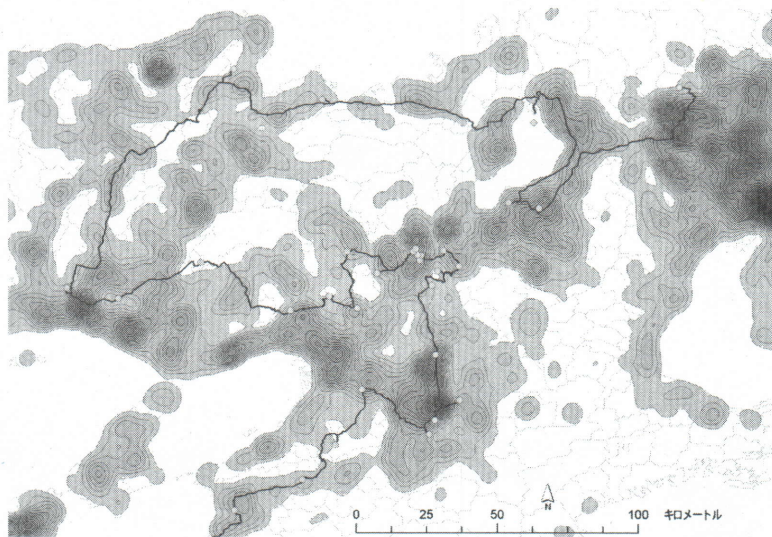


図42 近畿の神社密度と西国霊場

岡や北九州よりも高い。一方他の地域、とくに内陸や、東北、四国南部、東北南部では低い。

全国的にみた神社では、寺院の場合と同様に三大都市圏で高いが、寺院の場合ほどには集中しない(図45)。また信越、瀬戸内、山陰や九州南部などにも、やや高い地域が現れる。東北地方北部と北海道では低いが、寺院の場合ほどではない。また京都は寺院にくらべて神社の分布密度は低いが、名古屋では神社も寺院同様に高く、また熱田や津島のような大社も

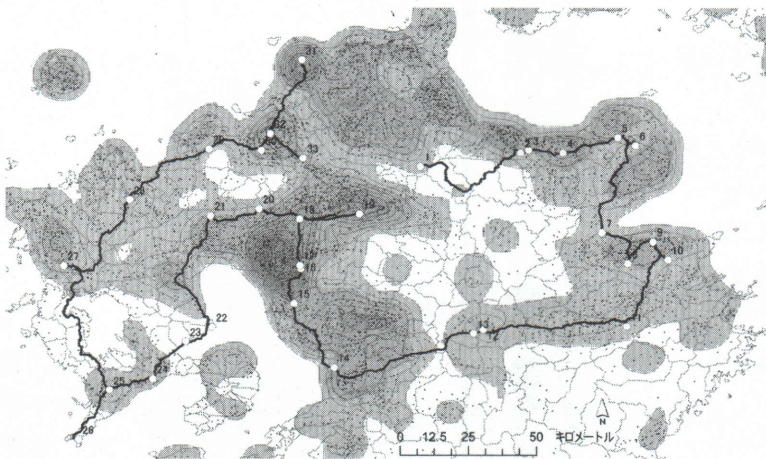


図43 九州北部の神社密度と九州西国霊場

いる。たとえば、観音を祀る霊場でも西国観音霊場は天台宗の寺門派とかかわりが深く、坂東観音霊場は同山門派とのつながりがみられる。さらに不動を祀る霊場は修験と、四国遍路をはじめ八十八ヶ所霊場は、弘法大師・真言宗とのかかわりがみられる。

IV 霊場の構造の検討

1. 霊場の空間的的広がりともまとまり

霊場は自然・歴史・社会などさまざまな方面に結びつくが、そうした宗教的事象については1) 宗教の分布や伝播状況を通じた信仰の地域への受容、2) 宗教の地域集団の存立・機能や文化景観への影響、3) 宗教の生成や信仰形態への自然環境の影響、4) 巡礼に伴う地域間ネットワークや社寺参詣などの宗教行動と観光との関わり(松井圭介, 2002)などから、地理的研究が進められて来た。霊場について、まずその存在が主要な分析対象であるが、それには霊場の開創とかかわる地域の解明が基本と考えられる。

前述のように、霊場や霊地の実態や、順路や札所の分布、また信仰施設の分布について明らかにしたが、それらにもとづき霊場の地域的な構造を検討する。霊場とよばれるものは広く存在するが、霊場にかかわる要素はいずれも各地で特有のため、霊場も各地で特有なものとなる。そして寺社、とりわけ寺院は移転などの変化が激しく、また人々の信仰も時代により大きく変わるため、霊場は時代により複雑に変容することとなる。

地域にはさまざまな多数の霊場が開創されているが、同規模で同種の霊場は重複しない一方、孤立もせずに共存している。前章でとりあげたのは主に一国霊場であるが、全国的に存在する代表的な霊場であり、それぞれは一国内に展開して、国境付近で他と接している。こうした一国霊場は霊場の中でも代表的なものであるが、それは時代を超えた地域的なまとまりの存在を示唆している。すなわち、領国支配や藩、また行政の範囲は時代により変遷するが、霊場が国単位でまとまることは、国の境がその地域の山や川など自然条件を基本にしていることにある。国は五畿七道の定められた律令制以来安定しており、多くの一国霊場が開創された藩政期においても、霊場の主要な地域的なまとまりであったことを示している。

2. 神仏習合の札所構成

霊場は地域により、また時代により異なるが、II章での霊場に示されるように、自然基盤が基本にある。

ところで、神を一柱、二柱と数えるのは、木を神体とする心性によるが、樹木は樹木を通して啓示されるもの、樹木が含意し、意味するものがあるために崇拜される(松井圭介, 2005)。同様にして、そそりたつ岩や、流れ落ちる水、さらに天にそびえる山などは、神殿がおかれるまでもなく、それら自体が拝礼の対象とされる。

葛城二十八品の経塚の立地は、1) 山頂や四方が切れ込んだ独立峰、2) 植林された山中の落葉樹などの異質な植生、3) 背後に山を負い左右に谷をもつ四神相応の場所、4) 古道や里道が会合する交通の要点、5) 岩窟や河川の巨岩、などである(中野栄治, 2006)。山嶺をたどるなかで経塚では柱源^{はしらもと}供養の行が行われたが、そうした場は樹木、岩や山、また神仏にまつわり、人々が行き交うところであった。

一国霊場の古い形態は、たとえば享保年間(1716-36)の「秋田六郡三十三観音巡礼記」より知られる。札所は平鹿郡・雄勝郡・仙北郡に18あるが、これら南部三郡は熊野三社を建てた小野寺氏の支配下にあって、第一番の白滝の観音は那智の写しであり、第六番吉祥院は三輪神社別当で蔵王権現・三輪大明神を祀り、第十六番小杉山円満寺は鎮守月山権現、第二十一番元正寺は太平山に飛ぶ薬師如来が本尊であるなど、山岳信仰とのつながりを示すものが多い(高橋富美雄, 2002)。

雄物川の南では小高い地が聖地であるが、他にも岩、樹、水などの要素をそなえることによって聖地となり、さらに個々の聖地をつらねて巡礼される。聖地のもとに自然があるため、それらを結んだ霊場も、基本的に自然に規定される。秋田観音霊場の札所は多くが山岳信仰にかかわるが、その結果として札所は内陸地域に多く分布する。

3. 修験の霊場への影響

秋田六郡霊場での第十五番黒尊佛は、大小25の奇岩怪石のある修験道の霊場であり、第十七番高寺山高善寺などは真言密教や山伏修験と関わった。文政八(1825)年には久保田藩内の当山派修験寺院は411、湯殿山行人派の寺院は42あった(高橋富

美雄, 2002)。比叡山では慈覚大師円仁の中国五台山巡礼を模したともいわれる比叡山の回峰行が始まり、葛城二十八宿回峰行の雛形となった。葛城修験道では法華經(顯教)的色彩が際立つが、葛城は距離がおおよそ二十八里で法華經二十八品を配するに相応しく、二十八宿と経塚、百八の行所が回峰された。天台宗寺門派や聖護院の台密系修験各派では「顯立、密立、修験立の三道鼎立護持」から顯教修行の山として葛城が重視された(優婆塞鉄山, 2005)。このように札所は修験の霊場であるが、それ以前に修験道では回峰行がなされていた。

空海も顯密両修行を必須とし、聖宝は醍醐寺を開いて東密系の修験道を始める。醍醐三宝院や高野山行人方でも、「顯立、密立の両儀軌両修法」から密立の大峰とともに顯立の葛城が重視された。さらに当山派修験道が旗頭となり、葛城を金剛界、大峰を胎藏界と観じて両者の入峯修行を必須大事とした。本山派修験道でも大峰の金剛界・胎藏界とともに、葛城を胎藏界の山と観じることもあった(優婆塞鉄山, 2005)。地方の里山の霊場にも金剛界・胎藏界が示される場合があることも、霊場と修験とのかかわりを示している。

また葛城では、本山派が仙台、会津、南部、水戸、武蔵、摂津、京都、播磨、薩摩などから常に入峰しているのに対し、当山派では大和を中心に和泉・紀伊の畿内周辺に集中し、江戸時代を通じて本山派よりも少ない(中野栄治, 2006)。七宝瀧寺は当山派とかかわるが、葛城二十八宿では天台宗寺門派・聖護院の本山派にかかわりが深い。和泉山脈の南にある西国第三番粉河寺、北にある第四番施福寺はともに天台系の寺院であり、天台系の霊場札所も多い。

4. 霊場間の階層関係

東京周辺の諸大師霊場は、南関東では御府内霊場を基本とし、その南に玉川八十八ヶ所霊場、西に多摩八十八ヶ所霊場、その北に奥多摩新四国八十八ヶ所霊場が設けられ、また御府内霊場の北が豊島八十八ヶ所霊場であり、やはり接続した霊場である。こうした国以下での地域的まとまりも一般にみられるが、こうした狭い範囲内に、霊場としてまとまるには、その範囲が庶民の共通理解を得られていることが必要であり、これらは日常歩いて回れる生活圏内でもある。

また前述のように一国霊場は広く各地にみられる

が、一国を超えて広がる、開創の古くよく知られた坂東観音霊場などがある。地方霊場は、この坂東観音霊場に接続する場合がみられる。たとえば、坂東観音霊場を親霊場とし、その札所を発願として子霊場が設定される場合が、安房観音霊場などにみられる。

近畿地方でも、西国観音霊場が古く基本であり、その下位の霊場として、若狭、伊勢、近江、丹波、河内、淡路、美濃、播磨の観音霊場など、旧国ごとに設定されたものが多数ある。こうした一国霊場はそれぞれが並列するが、西国観音霊場のような規模の異なる霊場との間で、空間的な階層関係が形成されることがある。

同規模の霊場が並列し、異なる規模の霊場が親・子・孫の関係になるのに対して、各地の小霊場を集めた形のものがみられる。たとえば四国遍路では、その中に密度の高い地域が複数存在する。これらはそれ以前にあった各地の個別の霊場を一つに集合したとみることができる。四国遍路の成立は近世であり、その発展は近年であるが、以前に存在した阿波、土佐、伊予、讃岐での一国あるいは准一国的な霊場を、再構成したことも考えられる。

5. 札所の特定地域への集中

各霊場において札所が一定の広がりを示すが、多くの霊場内では札所は必ずしも均等に分布せず、特定の範囲内に集中する場合が多くみられる。それは前章のように、等密度線に明瞭に示される。前述のように集中する地域とは、西国観音霊場では京都、四国八十八ヶ所霊場では阿波や讃岐、広島新四国霊場では広島市などである(表1)。

また同じ地域に展開する霊場でも札所分布の中心は異なることがある。たとえば九州でも九州八十八ヶ所霊場や九州薬師霊場では筑紫平野に中心がある一方で、九州不動霊場では国東にも大きな中心がある。

これらにはまず、地形などの自然条件がかかわる。それに加えて、地域の寺院勢力など信仰の基盤が影響するものと考えられる。さらに寺社政策による寺町の形成が、影響をおよぼしている。広島八十八ヶ所では広島城の周辺に札所が多いが、都市の周辺部に寺院が配置された寺町の形成は、近世の各地にみられる。そのため自然とならんで、信仰の中心や人々の住む町も、札所の集中の大きな要素となる。

そのため江戸では、元禄以降に開創された御府内八十八ヶ所では、天保のころの史料にある現在まで移動なく存続する寺院については順路が明瞭に現れるが、現在の札所の配置は不規則である。天保当時でも札所順は乱れていたが、開創当初には規則的な配置があったものと推定される。

6. 寺社の存在と霊場

霊場が地域的なまとまりをもつ一方、札所の分布が均等ではなく、札所の分布はその地域における寺社の分布とかかわるようすがみられた。Ⅲ章で示した寺社の分布は現在のものであるが、寺社とりわけ寺院の移動は激しく、霊場との対比を行うには、とりわけ霊場開創当時の状況が重要と考えられる。ただし霊場も寺社と同様に、時代の盛衰を経てきているので、現在における霊場と現在における寺社の分布を対比することは、一定の意味を有すると考えられる。

霊場の札所や巡拝路は、とくに寺院の密度分布とは必ずしも対応しないようすがみられた。とくに平安仏教では、寺院の立地には地形も独自の要件であったが、後世には都市の成長に従い、その内部にも寺院が多数開かれるようになる。開創の古い霊場はもちろん、新たに開創される霊場も、基本的に古刹が多く選ばれるため、必ずしも現在の寺院密度は、霊場と対応しないものと考えられる。

一方霊場の札所や巡拝路は、とくに神社の高密度分布地域に沿う配置がみられ、たとえば坂東観音霊場、西国観音霊場、九州西国霊場などではとくに明瞭であった。神社は寺院にくらべて移転は容易でなく、その分布も開創以降の変化は小さいことが考えられる。それとともに、札所として近世以前の多くの神仏習合下の寺社がかかわることは、明治以降にそれらが廃寺となる一方神社として存続の多いことが、霊場と神社密度の高さを対応させるものと考えられる。

7. 信仰圏とのかかわり

前述のように霊場の分布は神社の分布にかかわるが、現在の札所はほとんどが寺院である。地域に核となる有力寺院がある場合には、そこにまとまるようすがみられる。たとえば西新井大師、浅草寺のような著名寺院、また羽黒山のような修験の峰入地などである。越後観音霊場でも、長岡から出雲崎にか

けての東頸城丘陵付近で密度が高くなる。こうした分布密度の高い地域は、その中心の寺院・寺院郡の信仰圏にかかわることが考えられる。

また九州では、第二次大戦後に多くの霊場が開創されたが、同じ地域の霊場であるにもかかわらず、観音、大師、不動、薬師、地藏などで、霊場により札所の密度分布が異なった。これにはそうした信仰対象の性格がかかわると考えられる。さらに観音霊場でも、坂東観音霊場は天台宗山門派と、西国観音霊場は寺門派とかかわりがみられるが、坂東でも比叡山の慈覚大師の巡錫により天台宗に転宗され、西国でも三井寺の修行僧が巡拝している。大師霊場は真言宗、とくに四国の阿波では真言宗高野山派とのかかわりがみられる。不動霊場も、不動が修験で主要な信仰対象であることから修験とかかわりがあり、当山派などが高野山から葛城の根来寺へ、さらに京都の智積院へと移って真言宗智山派となったが、とくに真言宗智山派の成田・川崎・高尾の大本山のある関東では、関東不動霊場の開創にかかわることが考えられる。

V おわりに

本論では、霊場の構造の解明を目的として、東北、北陸、近畿地方における代表的な霊場およびその周辺社寺について、現地での実態調査を行った。さらに全国の主要な霊場について、巡拝路や札所・寺社の密度分布を分析した。さらに、こうした霊場と寺社などの信仰施設の地域的特色との比較にもとづき、霊場の構造の解明を試みた。本論での主要な成果は、以下のようにまとめられる。

- 1) 同規模の霊場の位置は重ならず、かつ孤立せず、それらは地域に棲み分けるようすがみられる。さらに霊場同士で、接続・連接する関係もみられ、空間的なネスティングあるいは曼陀羅のような構造がある。
- 2) 現在では村、町、郡、県のような行政単位が霊場の地域的まとまりに結びつくが、近世以前には五畿七道の諸国を基本として全国の六十六部(国)、州、道、都市や郡、などに、霊場の地域的まとまりがみられる。
- 3) 霊場のような地域的まとまりが成立する前提として、地域の信仰的基盤、すなわち神社や寺院など信仰施設の分布に示されるもの、がかかわる。

4) そうした地域的なまとまりとして、霊場が人々に受容される背景には、地域の自然的基盤がある。とくに諸国より下位の地域的なまとまりでは、島、半島、盆地、平野のような自然的基盤にもとづく社会的空間がかかわる。

5) また山、山系のような信仰的空間が基本にある。とくに古く開創された霊場には、山岳信仰の影響が強く現れている。

本論では、巡拝路や札所や寺社の密度分布という、形態的側面からみた霊場の構造の分析を試みた。調査では、霊場の基本は地域の自然的基盤にあり、さらに霊地における人々の行動に関しても、自然が大きな役割を果たしていることが強く現れた。それらについて、体系的な調査・分析が必要であるが、今後の課題である。

謝 辞

秋田、福井、奈良、大阪などでの調査では、現地の方々から、多大なご教示をいただいた。記して謝意を表する。

文 献

- 秋田魁新報社出版部編 (1998):『秋田三十三観音 霊場めぐり』秋田魁新報社, 156p.
- 井田寿邦 (2005): 中世の村と葛城修験—犬鳴山七宝滝寺と入山田村—。山岳修験, 38, 31-40.
- 優婆塞鉄山 (2005):『葛城修験雑記 (上)』私家版, 47p.
- 役行者霊跡札所会 (2002):『役行者霊跡札所巡礼』朱鷺書房, 225p.
- 勝山市教育委員会 (1992):『白山平泉寺 自然と歴史』49p.
- 北川弥平 (1974):『越の国三十三番札所案内』私家版, 73p.
- 齊藤壽胤 (1997): 祭りの文化—赤田大仏祭礼の祈りの構造から—。鶴舞 (本荘市文化財保護協会), 73号, 1-27.
- 杉原丈夫 (1980):『新訂越前国名蹟考』松見文庫, 743p.
- 関口真規子 (2006):「三ヶ寺」行人と修験道。山岳修験, 38, 41-58.
- 高橋富美雄 (2002): 秋田六郡 観音霊場と観音信仰。北方風土, 43号, 114-140.
- 田上善夫 (2003): 北陸および広域における霊場と

風祭の分布とのかかわり。富山大学教育学部紀要, 第57号, 59-73.

田上善夫 (2004a): 地方霊場の開創とその巡拝路について。富山大学教育学部紀要, 第58号, 159-172.

田上善夫 (2004b): 日本海側中北部の地方霊場の開創と寺社分布のかかわり。富山大学教育学部研究論集, 第7号, 35-48.

田上善夫 (2006): 巡拝路からみた霊場の構造とそ
の変容について。富山大学人間発達科学部紀要,
1 (1), 201-220.

談山神社編 (1998):『大和多武峯紀行』梅田出版,
107p.

中野栄治 (2006): 葛城の峰と修験の道。山岳修験,
38, 17-29.

膽谷健一 (2000):『葛城二十八ヶ所遍路 葛城
二十八宿・経塚巡拝入峯』犬鳴山修験道宝照院金
山隊, 113p.

福井県立博物館 (1987):『山々への祈り—越前五
山の神と仏—』86p.

松井圭介 (2002): 日本における宗教地理学の近年
の動向。宗教学・比較思想学論集, 第5号, 1-9.

松井圭介 (2005): 樹木信仰からみた日本の風土と
森林文化。日本山岳文化学会論集, 2, 37-45.

(2006年10月20日受付)

(2006年12月6日受理)